

令和6(2024)年度
文部科学省「青少年国際交流推進事業」委託事業

日独学生青年リーダー交流事業

報告書



National Institution For Youth Education
国立青少年教育振興機構

目次

事業概要	1
------	---

<派遣事業報告>

1. 参加者名簿	4
2. 日程	6
3. ダイジェスト	7
4. 学習成果発表会	20
5. 参加者アンケート	26
6. 個人レポート	27
7. 成果と課題	39

<受入事業報告>

1. 参加者名簿	42
2. 日程	44
3. ダイジェスト	45
4. 学習成果発表会	52
5. 成果と課題	60

事業概要

1. 事業趣旨

ボランティア活動を行っている日本とドイツの学生の交流を推進することで、高い国際感覚を備えた青少年を育成する。

2. 実施関係機関

(1) 主催

日本：文部科学省

ドイツ：家庭・高齢者・女性・青少年省

(2) 実施

日本：独立行政法人国立青少年教育振興機構

ドイツ：ベルリン日独センター

3. 研修テーマ

若者の社会参画

4. 参加人数

日本：12名、引率者2名

ドイツ：10名、引率者1名

5. 日程

(1) 派遣

事前研修 7月20日(土) ※オンラインで開催

派遣 9月16日(月)～9月30日(月) 15日間

(2) 受入

日本受入 8月28日(水)～9月11日(水) 15日間

派遣事業報告

1. 参加者名簿

	氏名	所属団体	学校名
団長	樋口 拓	青少年教育研究センター	
副団長	下仲 健太	国立淡路青少年交流の家	
1	天羽 礼	①ボランティアグループ「AQUA」 ②フリースクールスタッフ	筑波大学大学院
2	新井 麻愛彩	①こどもの学び困難支援センターsure ②JENESYS2023 大学訪韓団 OBOG ③アサカシティラボ	東京学芸大学
3	江崎 誠英	トレハンぎふ	東京大学 公共政策大学院
4	佐多 結菜	①ボランティア支援センター 学生スタッフ Seivior ②STUDY FOR TWO 成蹊大学支部 ③武蔵野市国際交流協会 ④武蔵野市教育部生涯学習スポーツ課 ⑤シェアキッチン MIDOLINO	成蹊大学
5	島光 佳乃子	国際ボランティア団体 BWP	立命館大学
6	塚原 大翔	国立磐梯青少年交流の家 法人ボランティア	福島県立テクノアカデ ミー郡山
7	野口 陽菜	①羽田航空少年団 ②ガールスカウト東京 166 団 ③渋谷区青少年吹奏楽団	日本航空高等学校
8	福元 萌	①NPO 法人 Mielka ②京丹後市夢まち創り大学 「京丹後市移住促進プロジェクト」	同志社大学
9	藤田 暖生	英数学館高等学校 インターアクト部	英数学館高等学校

10	古本 杏奈	①留学生お助け隊 ②Language Exchange Partner	兵庫教育大学
11	松山 玲子	①一般社団法人淡路エリアマネジメント ②早稲田大学公認ボランティアサークル	早稲田大学
12	横畑 あゆな	①NPO 法人国際自然大学校 ②溝口神楽団（伝統芸能）	都留文科大学



日独学生青年リーダー交流事業日本団

2. 日程

月 日	滞在地	時間	プログラム
9月16日 (月)	東京 ベルリン	午前 午後	羽田航空 発 ベルリン・ブランデンブルク国際空港 着 打ち合わせ
9月17日 (火)	ベルリン	午前 午後 夜	説明：ベルリン日独センター概要 オリエンテーション 講義・ワークショップ：子ども・若者の参画 講義：ドイツの青少年育成活動概要 団ミーティング
9月18日 (水)	ベルリン	午前 午後	訪問：ブント・ユーゲント（ドイツ環境自然保護連盟青年部） 連邦事務局 ベルリン市内歴史研修
9月19日 (木)	ベルリン	午前 午後 夜	訪問：【U25】ベルリン・オンライン自殺予防 （ベルリン大司教管区カリタス連盟 25歳未満オンラ イン自殺予防・相談） 自主研修 団ミーティング
9月20日 (金)	ベルリン	午前 午後 夜	自主研修 日独合宿セミナー 班別ディスカッション 交流会
9月21日 (土)	ベルリン	終日	日独合宿セミナー 班別ディスカッション 交流会
9月22日 (日)	ベルリン 及び ドレスデン	午前 午後	日独合宿セミナー 班別ディスカッション 全体会 ドレスデンへ移動 団ミーティング
9月23日 (月)	ドレスデン	午前 午後	ドレスデン旧市街見学 懇談：ザクセン州政府子ども・若者コミッショナー 団ミーティング
9月24日 (火)	ドレスデン	午前 午後	訪問：ドレスデン・サポータープロジェクト 訪問：マイセン郡青少年フォーラム
9月25日 (水)	ドレスデン	午前 午後	訪問：ドレスデン工科大学政治学研究所 懇談：ドレスデン工科大学学生 自主研修、団ミーティング
9月26日 (木)	ドレスデン	午前 午後	懇談：民主主義と勇気ネットワーク（NDC）ドレスデン支部 訪問：ザクセンYMCA（キリスト教青年会） 団ミーティング
9月27日 (金)	ドレスデン	午前 午後	団ミーティング、学習成果発表会準備 ホームステイ
9月28日 (土)	ドレスデン	午前 午後	ホームステイ 学習成果発表会、全体の総括 歓送交流会
9月29日 (日)	ドレスデン	午前	ドレスデン空港 発
9月30日 (月)	東京	午前	羽田空港 着

3. ダイジェスト

7月20日 事前研修会

オンライン上ではあるが、団員同士の初顔合わせの場となった。まず、主催者挨拶や事業詳細に関する説明があった。

午前には、守谷市国際交流員のソハツキ・シルビア氏を講師に招き、「ドイツを知る」をテーマに基礎知識に関する講義を受講した。午後は、白梅学園大学・白梅学園短期大学学長の小玉重夫氏より、「日本における若者の社会参画」をテーマにご講義いただいた。

事業テーマに関連する講義や、過年度参加者からの体験談を聞くことで、訪独に向ける心構えが形成された。

9月7日～8日 日独学生青年リーダー合宿セミナー

●9月7日（土）合宿セミナー1日目

ドイツ団と顔合わせをした後、若者の社会参画について、2グループに分かれてディスカッションを行った。ボランティア活動や歴史教育の現状、若者のスポーツ支援などについて意見交換を行った。

夜には夕食歓迎会にて、ドイツ団と共に夕食をとった。ドイツ団による出し物のクイズなどを通して交流を深めた。



●9月8日（日）合宿セミナー2日目

午前中は、前日に引き続き2グループに分かれてディスカッションを行った。前日のディスカッションで消化しきれなかったトピックや、新たに出てきた疑問などについて、意見交換を行った。

午後には両国の団員全員による全体発表会が行われ、各々が合宿での気づきと、今後学びたいことについて発表した。

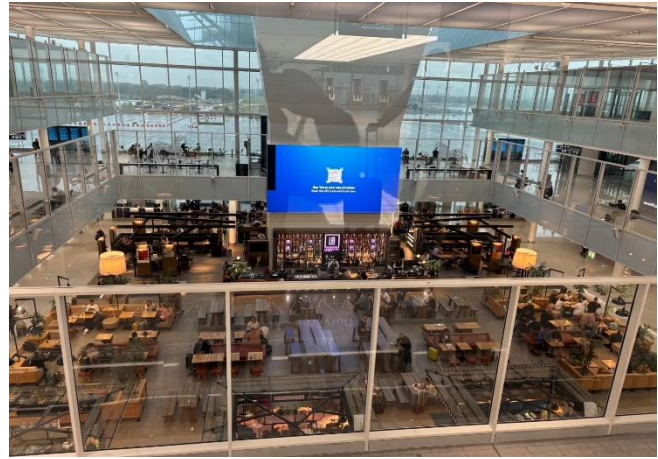
最後にはドイツ団から日本団へのお土産贈呈や写真撮影などがあり、各団員がドイツでの再会を約束し、今回の別れを惜しんだ。



9月16日～20日 ベルリン研修

●9月16日（月）出国・ドイツ到着

早朝7時40分に羽田空港に集合し、日本を出国した。長時間のフライトの後、ミュンヘン空港に到着。乗り継ぎのため空港内を各自散策し、ドイツへの上陸を実感した。その後再度飛行機に搭乗し、ベルリン・ブランデンブルク国際空港に到着。ホテルに向かい、事務連絡を受け、日独ベルリンセンターが頼んで用意してくださっていたサンドウィッチやゆで卵の入ったお弁当を手にと各自部屋へ移動して休息を取った。



●9月17日（火）ベルリン日独センター訪問・講義受講

ベルリン日独センターを訪問し、ザクセン州青少年連合事務局長のヴェンケ氏より講義を受けた。「参画」と「参加」の違いや若者の参画方法にはどのようなものがあるのか、参画の現状は如何であるのか、ドイツ連邦共和国における青少年援助の構造などについて知る機会となった。さらに、社会的影響がなくとも参画することに意義があることや、家庭や学校といった小さな社会から政治に関わる大きな社会に至るまで、様々な場面で大人が若者の声を反映することは、若者にとって「成功体験」として自信や自己肯定感の向上に繋がるのだと学ぶことができた。

夜には、日独学生青年リーダー交流事業のOB・OGや今年度のドイツ団の方と夕食を共にし、ボランティア活動や交流事業等について話をしながら交流を深めた。





●9月18日（水）BUNDjugend(ブント・ユージェント)訪問、ベルリン市内歴史研修

午前中はブント・ユージェント(ドイツ環境自然保護連盟青年部)連邦事務局を訪問し、講義を受けた。ブント・ユージェントは27歳以下の若者によって構成される、環境政策について考え方を考えるよう政府に要求するのみならず、デモやキャンプ、サステナブルに関する研修などを通して若者にアクセスし自身の足元から変えていこうとしている団体である。日本とは異なり、ドイツでは環境に対する意識が政治的側面にまで及んでいることや、日本では聞き馴染みのない「グローバルノース/グローバルサウス」や「グリーンバンド」等の概念、そしてブント・ユージェントの活動目的の一つである「グローバルな正義」に関して、植民地的な名残の構造を撤廃することがドイツに課せられた使命であるという、歴史的背景による考え方も垣間見えること等を知ることができる、学びの多い時間となった。

午後は「ナチス時代、東西ドイツの分断とベルリンの壁、ドイツ統一に至るまでの歴史」をテーマに、クリスティアン・ハーヤー氏の講義を聞きながらベルリンの市内歴史研修を行った。ナチスによる安楽死計画によって殺害された犠牲者の展示やベルリンの壁、ナチスの計画によって亡くなった方々の慰霊碑などを訪れ、様々なイニシアチブによってドイツの歴史的資料等が現存していることを学んだ。現地では歴史を学ぶことの大切さと、負の歴史と向き合うことの必要性を痛感した。





●9月19日（木） [U25]ベルリン・オンライン自殺予防 訪問・講義、自主研修

[U25]ベルリン・オンライン自殺予防を訪問し、講義を受けた。この団体は25歳未満の青少年を対象としてオンライン相談を提供し自殺予防の取り組みを行っている。ここではドイツでの若者の自殺の現状や自殺に至るまでのプロセスを学んだ。また、重い問題に向き合う必要があるため、ボランティアの人たちへのケアの重要性についても学ぶことができた。実際にピアカウンセラーとしてボランティアをしている方のお話も聞き、とても勉強になった。この団体には今年のドイツ団の団員の方もおり、ドイツでの再会を喜んだ。

午後は自主研修であり、それぞれの関心のもとベルリンを散策した。



9月20日～22日 日独学生青年リーダー合宿セミナー

●9月20日（金） 自主研修、合宿セミナー1日目 交流会

この日はベルリン滞在最終日であった。午前中は自主研修であり、最後のベルリンを各々楽しみながら学びを深めた。

その後日独学生青年リーダー合宿セミナーが開催されるラーヴェンスブリュックにドイツ団とともにバスで移動した。この地はナチス時代に女性用強制収容所があった場所であり、私たちが泊まる宿舎は女性看守が使っていたものである。強制収容所の生存者たったの願いによってこの地はユースホステルとして活用され、国籍問わず様々な国の若者の出会いや交流の場となっていると学んだ。夜の交流会ではファシリテーターの紹介や新しいディスカッション班の顔合わせ、自己紹介、そして様々なゲームが行われた。ドイツ、日本という国の壁を越えて楽しめるものであり、交流の中で自然と笑顔がこぼれた。



●9月21日（土）合宿セミナー2日目 ラーヴェンスブリュック警告・追憶の場所(強制収容所跡)見学、班別ディスカッション、交流会

午前中は強制収容所跡をガイドの説明を聴きながら見学した。この際、ドイツ団、日本団共に静かにガイドの説明に耳を傾け、それぞれ歴史的事実を真剣に受け止めていた。

その後の班別ディスカッションでは二つの班毎に、この見学の感想を共有した上で、若者の社会参画についてや教育、政治、歴史認識、多様性社会など様々な分野の事柄を議論した。

夜の交流会では日本団からの出し物としてまず、英訳付きの折り紙の解説書を用いてグループで協力しながら折り紙を折った。次に行われた阿波踊りでは音楽と掛け声とともにドイツ団、日本団が輪になって踊った。ドイツ団からは椅子取りゲームの出し物があり、日独両国の団員が肩を組んで仲を深める場面が見られた。その後、司会なしでの交流が継続され、ドイツ団からのプレゼントであるお菓子と飲み物を楽しんだ。また、お互いにサインを書き合い、世界に一つしかないオリジナルのトートバッグを作った。両団の絆を深める良い機会となった。





●9月22日（日）合宿セミナー3日目 班別ディスカッション、全体会発表

朝はドイツ団、日本団ともにラジオ体操を行った。天気は快晴で気持ちの良い朝の運動となった。

この日も昨日に引き続き班別ディスカッションを行った。全体会の発表に備えて発表の準備もドイツ団、日本団それぞれの団員が協力しながら行った。

全体会の発表では模造紙や付箋を活用して発表を行う班もあり、各班で話し合った内容を共有した。ドイツ団、日本団が協力して行った発表によってそれぞれの班で活発なディスカッションが行われたことがみてとれた。

その後ドイツ団との別れを惜しみつつ、次の研修地であるドレスデンへバスで移動した。



9月23日～30日 ドレスデン研修

●9月23日（月）ドレスデン旧市街見学、ザクセン州政府子ども・若者コミッショナーと懇談

午前はドレスデン旧市街の見学を行った。ザクセン王国時代から残る壁画や、戦後に復元された聖母教会など、ドレスデンの歴史に深く関わる建造物の数々を観てまわった。

午後はザクセン州社会福祉・協力省にて子ども・若者コミッショナーとの懇談があった。この懇談を通して、子どもの権利問題、特に教育に関する平等性の問題についてや、現在ドイツ全体で若者の右傾化が進んでいるという問題を知った。

夜はホームステイでお世話になるホストファミリーとの夕食会が行われた。交流を通して各ファミリーと楽しい時間を共有した。



●9月24日（火）ドレスデン・サポータープロジェクト訪問、マイセン郡青少年フォーラム訪問

午前はドレスデン・サポータープロジェクトを訪問した。ディナモ・ドレスデンというサッカーチームのホームスタジアムで、この団体が行っている活動を中心に説明を受けた。スタジアム内の見学など、貴重な体験もできた。

午後はマイセン郡青少年フォーラムを訪問した。この団体は、マイセン郡の青少年が集まり、組織の運営や、自分たちがやりたい活動を立案、計画、実施しているほか、地域内の青少年団体に助成活動を行う団体だった。夕食はそこで活動する青年ボランティアたちとバーベキューを行い、交流を深めた。



●9月25日（水）ドレスデン工科大学政治学研究所（政治教育における教授法）訪問、ドレスデン工科大学環境イニシアチブの紹介

日本団はドレスデン工科大学を訪れた。そして午前と午後で二つの分野についての研修を行った。

午前には政治学研究所を訪問した。ここでは民主主義とゲーミングというテーマの講義を受けた。様々なゲームから社会的価値観を見つけられることや、メディアと社会の関連性を思わせるゲームを体験することなど、若者に身近なゲーム媒体を通して社会を知る方法を学ぶことができた。

午後は環境イニシアチブという団体を訪問した。自然豊かな環境でリラックスしながら環境に対する考え方について意見交換を行った。

その後はホテルに戻り、各自、自主研修の時間となった。



●9月26日（木） 民主主義と勇気ネットワーク（NDC）ドレスデン支部と懇談、ザクセンYMCA（キリスト教青年教会）活動紹介 CV JM Sachsen

午前は民主主義と勇気ネットワークの講義とワークショップを受けた。この団体は市民が偏見や先入観に立ち向かい、差別が起きたときに逃げない勇気を持たせる手助けをするため子ども・若者・大人に向けて政治教育を提供している団体。ここでは、社会的な成果とされるトピックをそれぞれ興味のあるものを選び、知っていることはあるか、自分にとっての民主主義についてどのような関係があるか、この社会的な成果とされているトピックは本当に実現しているのかディスカッションを行い、共通認識を持ち最終的には自分たちには何ができるかを学んだ。

その後、講義会場であった環境センター内にあるビーガンレストランで昼食をとった。

午後はザクセンYMCAから「自発的社会活動年と青少年団体」を研修テーマとした講義、活動紹介を受けた。この団体はホリスティック教育、カウンセリング及びボランティア活動に重点を置き団体活動を行っている。当団体はキリスト教団体ではあるが信仰に関係なく参加できる団体であること、キリスト教的価値観とボランティアの関係などを学んだ。



●9月27日（金）団ミーティング、ホームステイ

午前は明日の学習成果発表会に向けたミーティングを行い、発表資料や原稿の作成などを行った。

午後はホストファミリーにお迎えに来ていただき、ホームステイ開始。それぞれドイツの家庭に暖かく迎え入れていただき、ドイツ流の半日を過ごした。文化や新たな生活感の違い、家族のあり方などを学ぶ良い機会となった。





●9月28日（土）ホームステイ、団ミーティング、学習成果発表会と全体の総括、歓送会

午前はホストファミリーと過ごし、ドイツの観光名所に連れて行っていただいたりした。ドイツの家庭での一日は日本では体験のできないとても貴重なものになった。

午後は、最終団ミーティングを行い、学習成果発表会に挑んだ。学習成果発表会では、生活の気づき・ボランティア・政治・歴史・教育についてドイツで学んだこと、ドイツの若者のボランティアへ意欲が高い理由についての考察を発表した。その後、歓送会でドイツ滞在最後の夜を楽しんだ。



●9月29日（日）帰国

ホテルロビーにて受け入れ担当者、通訳士の方にお礼として記念品を贈呈、滞在中の謝意を表した。

その後バスに乗りドレスデン空港へ移動。お見送りに来て下さった、受け入れ担当者、通訳士の方との別れを惜しみながらドレスデン空港からフランクフルト国際空港へ。フランクフルト国際空港にてドイツ最後の時間を過ごし、日本へ向けて空港を出発した。



●9月30日（月）帰国

日をまたぎ朝、羽田空港へ到着。研修の総評を行い解散した。



4. 学習成果発表会

私たちは日独学生青年リーダー交流事業に参加し、国内外での研修を通じて、「若者の社会参画」を学んだ。積極的に社会参画しているドイツの若者との対話や交流は、日本では得ることのできない大変有意義な研修であった。ドイツ研修の最終日に実施した学習成果発表会では、研修で得た学びとして、以下の6つをテーマにプレゼンテーションを行った。

- ① ドイツでの生活の気づき
- ② ボランティアに関して
- ③ 政治に関して
- ④ 歴史に関して
- ⑤ 教育に関して
- ⑥ ドイツのボランティア意欲の高さへの考察

① ドイツの生活面での気づき

(1) 労働者の権利と労働環境

お店の閉店時間が早く、日曜日も休業している店舗も多い。コーヒープレイクの実施も一般的で労働者の権利や生産性が守られている。また、日本と異なる点として、施設の維持管理のためにトイレといった公共施設が有料となっていた。

(2) 主義、主張

ドイツでは年齢にとらわれずに意見を出すことが当たり前になっている。

(3) 環境と持続可能性

缶やビンをデポジット制にしてお店での回収を促していたり、公共のトイレでリサイクルペーパーが使用されていたりした。また、ホテルでのタオル交換が希望制であり、環境への配慮が垣間見えた。



② ボランティアに関して

(1) 相違点

① 定義の違い

日本ではボランティアは無償という概念が一般的だが、ドイツでは有償のボランティアも存在しており、ボランティアの定義が広い印象を受けた。

② 価値観の違い

日本でのボランティアは人の役に立つことを行うことを指すが、ドイツの方はそれに加えて自分の成長や興味関心のためにボランティアを行っていた。

③ 制度の違い

日本ではボランティアに対する制度が不十分であるのに対し、ドイツではボランティアを行うことによって施設で割引を受けられたり、大学入学時の加点要素になったりと、ボランティア参加に対するモチベーション維持をする上での制度が充実している。

(2) 共通点

日独で目的は違えど、自主的な活動である。

(3) 日本に持ち帰る成果

- ・ GAP YEAR制度や社会活動奉仕年を設けることで、主体的に社会参画できるのではないか。
- ・ ドイツ団の方が「ボランティアは自分の日常生活を彩るものだ」と言っていたのが印象的だったため、そのようなマインドの形成が日本においても必要ではないか。
- ・ 日本とドイツとの違いを価値観だけで終わらせるのではなく、私たち一人一人が主体的に活動して個の活動の輪を広げるべきではないか。



3. 政治に関して

(1) 相違点

① 関心の違い

日本では家族や友人を政治について話す機会があまりないのに対し、ドイツでは誰とでも話すことができる。

② 情報の透明性の違い

ドイツでのボランティア団体は国からどの程度の金銭的支援を受けているかをしっかり把握して各々が活動していた。

③ 移民に関する意識の違い

日本では多くの人が「日本人か日本人でないか」で区別するのにに対し、ドイツでは移民のルーツを気にする方が多かった。

(2) 共通点

- ・ フェイクニュース、SNS などのメディアリテラシーが課題である。
- ・ 若者の意見が政治にまでフィードバックされていない現状がある。
- ・ 過激な情報に対するコマーシャリズムに対して危惧している。
- ・ 有給休暇の取得が少しずつ進んでいる。
- ・ 教育が政治を形作っている。

ドイツでは基礎知識を議論に基づいて学ぶのに対し、日本では事実を暗記することを基本とした学びを行っている。

(3) 日本に持ち帰る成果

情報過多な時代の中で、情報を如何に捉えていくかが重要である。また、メディアリテラシーやコマーシャリズムに対する対策として critical thinking の姿勢を持つことが今後さらに重視されるべきではないか。



4. 歴史に関して

(1) 相違点

①歴史事象に対する反省の仕方が異なる

ドイツでは自国がどのような歴史を歩んできたのかについて、具体的な事象を踏まえ、ディベートなどで学ぶのに対し、日本では淡々と歴史を学ぶにとどまり、議論を踏まえて学ぶことが少なく抽象的である。

②歴史観

日本では事実のみ暗記によって学んでいるのに対し、ドイツでは自国がどのような歴史を歩んできたのかを深く理解しているため加害者意識をもって学んでいた。

(2) 共通点

①第二次世界大戦後に反省と贖罪を行っている

ドイツは過去イスラエルなどへ賠償金の支払いを行っているのに対して、日本もインフラ施設の建設や賠償金の支払いを行っている。また、ナチスや軍国主義が台頭しないための教育を進めてきた。

②戦争に関する悲惨な現場が残されている

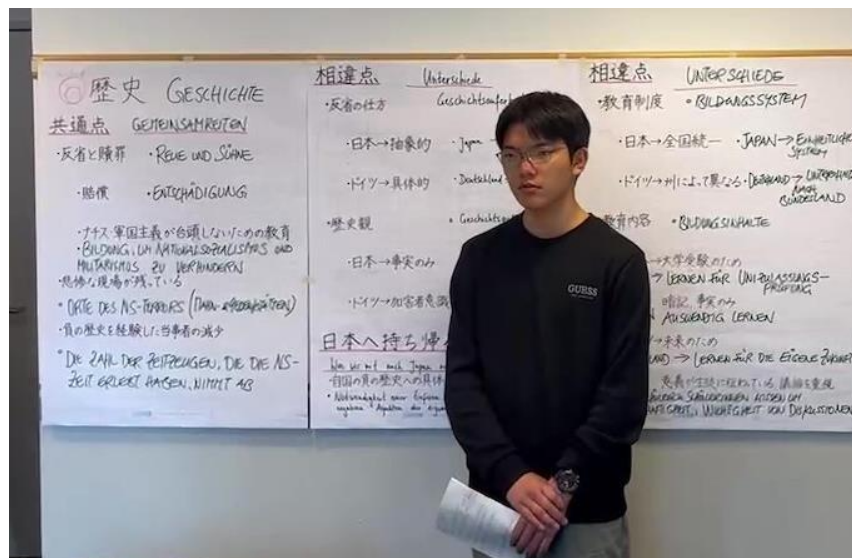
ドイツではラーゲンスブリュックでの強制収容所跡が、日本では原爆ドームが存在し、教育課程において修学旅行や課外学習を通じてそれらの負の遺産に訪れる機会がある。

③負の歴史を経験した当事者の減少

第二次世界大戦から80年が経過し、語り部が減少してきている。このことにより戦争に対する危機感が失われる懸念がある。

(3) 日本に持ち帰る成果

自国の負の歴史に対して具体的な理解をすること、そしてその必要性を認識することが大切なのではないか。



⑤教育に関して

(1) 相違点

①教育制度

日本では文部科学省が統括することで全国どこでも同じ教育を受けることができるが、ドイツでは州ごとに教育内容を決めることができる。

②教育内容

日本では大学受験のための教育になっているのに対し、ドイツでは大学のみならずその先の人生で役に立つための教育を行っている。また、ディスカッションを多く取り入れているため、自分で考え、他人に伝える習慣が身についている。教育の意義もしっかり生徒に伝わっている印象を受けた。

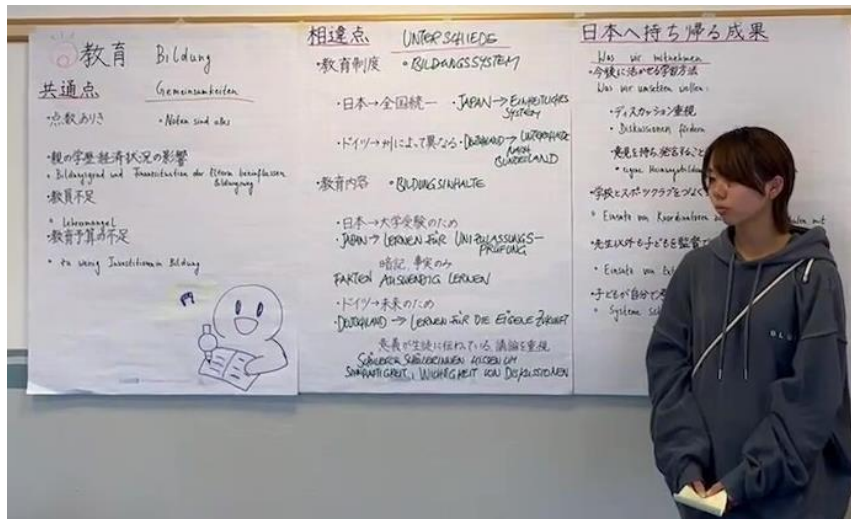
(2) 共通点

- ・ドイツでは自発的社会活動奉仕年の活動※による加点はあるものの、学力試験は概ね点数で決まる。
- ・親の学歴や経済状況が、子どもが受けられる教育水準に影響する。
- ・教員や教育に対する予算が充分でない。

※ドイツには、16～27歳の若者を対象とした公的な社会奉仕活動として「自発的社会奉仕活動年(Freiwilliges Soziales Jahr)」と呼ばれるプログラムが存在する。

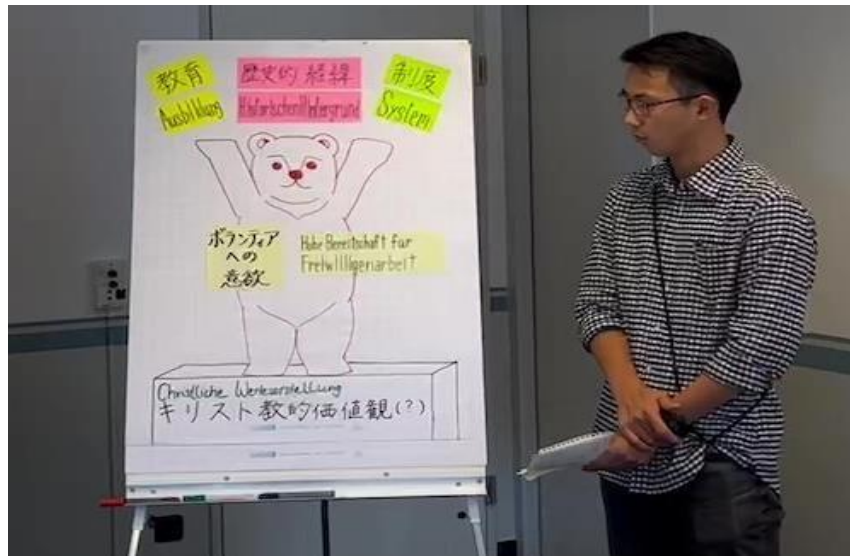
(3) 日本に持ち帰る成果

- ・ディスカッションにより自分の意見を伝える環境作りをすべきではないか。
- ・学校とスポーツクラブをつなぐコーディネーターの設置を促進するべきではないか。
- ・子どもが自発的に参画できる仕組み作りの構築に焦点を当てるべきではないか。



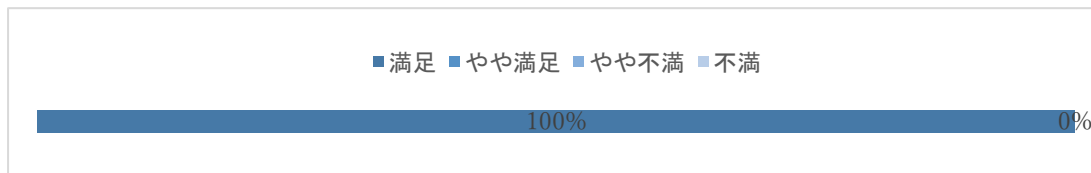
⑥ドイツのボランティア意欲の高さへの考察

以上、ドイツと日本の共通点・相違点を踏まえて、なぜドイツではボランティアに対する意欲が強いのかを考察した。その土台には弱者を助けるキリスト教に基づく価値観が根付いていると考えられる。ナチスが台頭する前はキリスト教の布教が盛んであり、中世から慈善活動が盛んであった。このような考えと現在のドイツの教育・歴史的経緯・制度が複雑に絡み合うことで、ドイツ人の社会参画に対する根本的な考えを構成していると考えた。



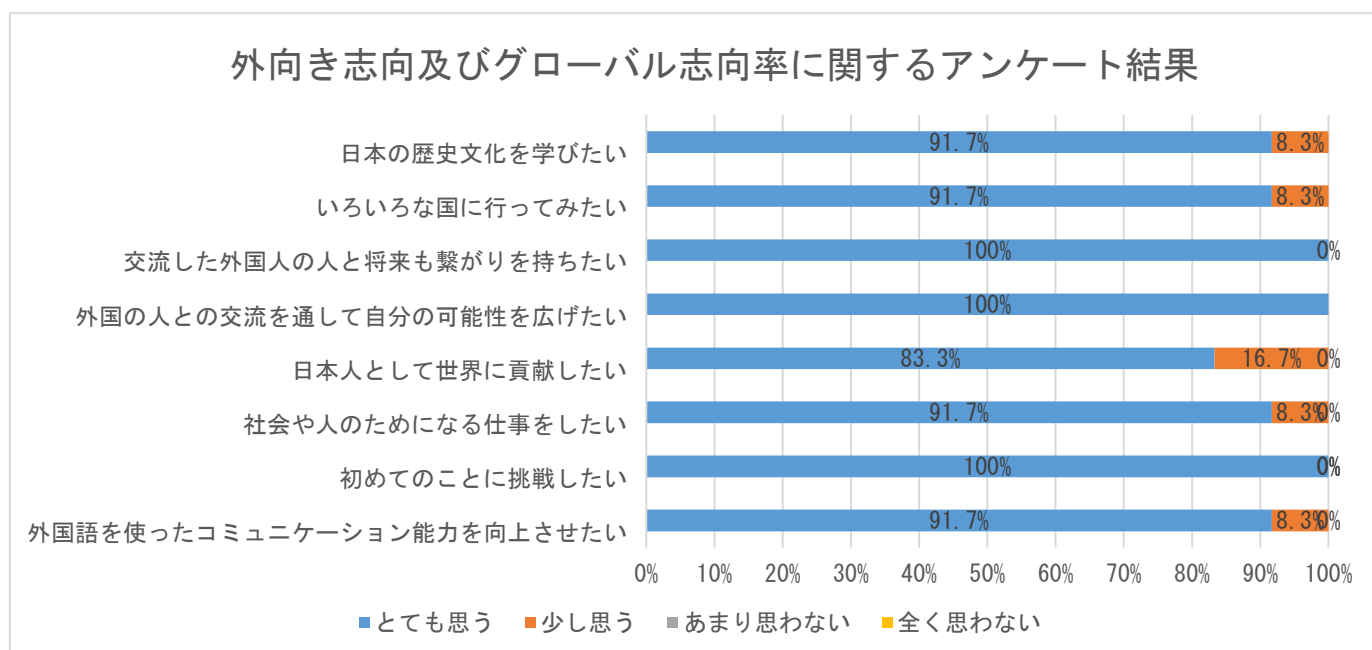
5. 参加者アンケート

(1) 事業全体の満足度



「事業全体の満足度」に対する回答は、派遣者12名全員から「満足」という回答を得ることができた。

(2) 外向き志向率、グローバル人材率



【外向き志向とは】

文部科学省の定めた調査項目3項目「日本人として世界に貢献したいと思いますか」「外国の人との交流を通して自分の可能性を広げたいと思いますか」「交流した外国の人と将来も繋がりを持ちたいと思いますか」の結果を集計したものである。当機構では、それらの問いに対して肯定的な回答の合計が80%以上を得ることを目標とし国際交流事業を行っている。

【グローバル人材志向率の分析】

当機構では、上記の外向き志向調査に加え、独自に語学力・コミュニケーション能力及び異文化に対する理解と日本人のアイデンティティ等を加えた8項目のアンケートを作成し、「グローバル人材志向率」として、平均80%以上の肯定的な回答を得ることを目標に事業を実施している。本事業においては、肯定的な回答が100%となっている。

■氏名：天羽 礼
 ■所属団体： AQUA、フリースクールスタッフ
 ■活動内容 (50字以内)：①フリースクールスタッフとして、不登校の児童や多様な悩みを持つ青少年の社会参画をサポート。
 ②発展途上国ウガンダや、内戦の続くシリア難民へ支援物資を寄贈する国際支援ボランティア活動を行っている。

■ドイツで学習したこと

「若者の社会参画について」(400字以内)

「デュナモドレスデン サポーター・ソーシャルワークプロジェクト」を訪問した。デュナモドレスデンは、ドイツ3部リーグのサッカーチームで、1950年に創設され、過去にはドイツ一部リーグで優勝経験もあるチームだ。このサポータープロジェクトとは、ドイツ全土に70以上ある社会教育的サポーター事業の1つで、2005年に青少年援助分野における民間公益実施団体として認可され、ドレスデン市(25%)・ザクセン州(25%)・ドイツサッカー連盟(50%)から資金援助を受け、若いサポーターのスティグマ化の防止と減少、サッカースタジアムを中心に地域に根差した活動の支援などを行っている。具体的には、8~18歳の青少年を対象に、以下のようなテーマでワークショップを月に2回開催している。

- ・フェアプレイとは何か? Ex)学校におけるフェアプレイとは何か?
- ・暴力はオフサイド Ex)暴力をふるわずに問題を解決するにはどうしたらよい?
- ・ボールはカラフルだ Ex)サッカーを具体例として挙げながら、人種差別、性差別、マイノリティ差別問題について考える

また、学校が「デュナモドレスデン サポーター・ソーシャルワークプロジェクト」をはじめとする、多分野の組織と連携しているという点は、若者の社会参画が推進されやすい環境だと感じた。

■ドイツでの学習をどのように活かしたか。(1,200字以内)

私は、自身の修論において、「部活動の地域移行」をテーマに研究を行っている。今回、ドイツのスポーツクラブを訪問することができ、様々な新しい知見を得ることができた。例えば、日本の「部活動」という文化の無いドイツでは、子どもたちは学校が終わると、地域のスポーツクラブで活動を行う。このドイツのような形態を、日本も理想として掲げ、現在地域移行を推進しようとしている。しかしながら、人、施設、お金の面で課題が山積みであり、どのように解決するか、手探りで行なっている状況だ。

ドイツのスポーツクラブは、1ヶ月約1600円という非常に安い会費で運営されている。その理由は、人件費にあった。スポーツクラブのコーチはほとんどが有償のボランティアで補われている。彼らは、普段は本職を行ないながら、隙間時間を活用し、子どものスポーツクラブの指導をボランティアで行っているようだ。ドイツ団の中にも、アイスホッケークラブのコーチのボランティアを行なっているという人がいた。

日本でも、ドイツのように、ボランティアとして、子どものスポーツ指導に関わる人が増えることで、指導者不足と金銭的な問題が解決され、子どものスポーツ環境が豊かになると考える。

また、ドイツでは、貧しい家庭や子どもに対する支援が充実していた。スポーツクラブに通うことができない子どもに対して、政府が資金援助を行う制度が整備されている。日本においては、生活補助等の資金援助はあるものの、子どものスポーツに関する特別な補助金は無い。部活動の地域移行政策が進むことで、無償だった部活動が、どうしてもお金のかかるものになってしまう。家庭の所得の格差によって、スポーツをしたくてもできない子どもが生まれないよう、そこに対する資金援助を整備していく必要があると感じた。

以上のような気づきや発見を、自身の修論に活かすことができた。

■今度行いたいこと(200字以内)

日本とドイツの学校体育の違いを比較したい。日本は、週に3回の学校体育授業が行われているが、ドイツは週に1回だ。また、学習指導要領も、日本は全国一律であるのに対して、ドイツは州によってカリキュラムが異なる。こういった日独の学校体育の違いが、子どものスポーツ観にどのような影響を及ぼすのか、調査してみたい。

■氏名：新井 麻愛彩

■所属団体：①アサカシティラボ、②ハイサイウチナーラボ、③JKAF (JENESYS2023 大学生訪韓団 OBOG)

■活動内容 (50字以内)：

①埼玉県朝霞市内でこども大学あさかの運営。②オンラインでの沖縄の子ども食堂の支援。③日韓交流活動。

■ドイツで学習したこと

「若者の社会参画について」(400字以内)

私はドイツと日本の若者の社会参画の共通点・相違点を意識しながらこの交流事業に参加した。ドイツでの講義やボランティア団体の訪問、日本やドイツでの合宿セミナーを通して多くのことを学んだ。その際、ドイツは社会奉仕活動年などに代表されるようにボランティアを支援する仕組みが日本と比較して整っているような印象を受けた。さらに、ドレスデン工科大学政治学研究所を訪問した際に、すべての教科の教職課程の学生を対象に政治教育について教授を行っていることに驚いた。日本では政治教育を担っているのは多くは社会科の科目であり、必然的に社会科の教員が中心的に担当することになっていると感じる。私自身が社会科の教員になるための教職課程をとっているため、この事実には衝撃を受けた。ドイツの政治教育は日本よりも進んでいると思う。この要因がこうした教員側にもあるのではないかと考えた。

■ドイツでの学習をどのように活かしたか。(1,200字以内)

日本に帰国して初めに自分が所属する団体であるアサカシティラボのミーティング内で成果発表会を行った。この団体では市内の小学生を対象にワークショップを実施している。訪独前の活動において多動症の子どもへの接し方について頭を悩ませたことがあった。悩んだのは私だけではなく、同じボランティアの方も対応に自信があるようではなかった。ここから、私はドイツ研修において何かヒントを見つけることができないかと考えた。研修の中で青少年を対象としたワークショップを実施している団体に質問し、解決策へのヒントを得ることができたため、この成果発表会でボランティアの方々に報告した。報告内容を簡単に記述する。「ワークショップで子どもと接する際に以下のことを意識する。①高圧的な態度で参加を強制しない。②集中力を続かせるために短い休憩や軽い運動をはさむ。③ゲームをまじえたウォーミングアップ。それでも騒いでしまう子どもには役割を担当させることで自分には特別な責任があると実感してもらうことが大切である。」こうした内容はこども大学で子どもと接する上で有効である。学生メンバーだけでなく、社会人の方にも報告することができ、今後の活動に活かすことができた。

次に私は教育学部の社会コースに所属しており、小学校教諭、中学校社会科教諭、高等学校地理歴史科、公民科教諭の免許状取得のための教職課程をとっている。大学の授業の中で授業の指導案や模擬授業をする機会がある。この際にドイツで学んだことを活かそうと意識している。ドイツでは若者の政治教育について多く学んだ。日本では政治教育は社会科の授業の中で行うことが通例となっている。そのため、授業の指導案を作る際、ドイツで学んだ日本よりも進んだ政治教育についての内容を織り交ぜることを意識したい。政治教育で大事なことはボイテルスバッハコンセンサスと呼ばれる概念である。これは教員による思想の押し付けの禁止や論争性の原則、生徒思考の原則などからなる。これが提唱された背景にはナチス時代に洗脳のために政治教育が利用されたことがあげられる。日本でも教育基本法第14条第2項が類似していると考えられる。しかし、日本ではこの規定のもとに教育現場において政治そのものを扱うことがタブーであるかのような風潮が生まれてしまった。これがドイツとの相違点であると考えられる。ドイツではボイテルスバッハコンセンサスがあるにも関わらず、日本よりも進んだ政治教育をしている。選択制の授業の中で具体的な政党の政策についても学ぶことができると伺った。こうしたドイツにおける政治教育の概念や手法は日本での社会科における政治教育に活かせるものが多いと感じた。こうした点をまずは大学での教職課程の授業で意識している。こうした経験を積み重ねていき、さらには来年の教育実習でも実践的に学んだことを活かせるようにしたい。

■今度行いたいこと (200字以内)

子どもに関わるボランティア活動の現場で今回学んだワークショップでの子どもの接し方について更なる実践を積みみたいと考えている。問題を抱えている子どもたちへの支援には訪れた多くの団体の手法を組み合わせることが効果的であると感じた。さらには、来年度に控えている小学校での教育実習の中で実際に政治教育についてのアプローチを自分なりに行いたい。かみ砕きながら授業をし、政治参加への敷居を少しでも低く感じさせたい。

■氏名：江崎誠英

■所属団体：トレハンぎふ

■活動内容 (50字以内)：岐阜県内で活躍したいという想いを持つ若者を横につなぐプラットフォームを設立・運営。

■ドイツで学習したこと

「若者の社会参画について」(400字以内)

日本とドイツでは若者の社会参画への意欲が天と地ほど大きく異なっていることが分かった。これは日本の若者が社会に関心を示さなくとも安心して生きていくことができるから、という理由だけではないことを学んだ。ドイツにおける若者の強い社会参画の意識は、ナチスといった歴史の惨劇からの反省と学びやボランティア団体への政府による手厚い支援、教育制度などが複雑に連携を取り合いながら醸成しているものである。さらに、ドイツの若者にとって日本の多数のボランティア所属団員とは異なり、受験や就活での評価を目的としたものではなく規範としてボランティア活動を行うべきだという考えが浸透していることに驚いた。ドイツでの研修を通じて「社会参画」が若者にとって身近なものだと感じられるための制度作りの模範的な社会に身を置けたのが最大の学びである。

■ドイツでの学習をどのように活かしたか。(1,200字以内)

私はドイツで学んだ「社会参画の身近さ、ハードルの低さ」を私の周りにいる方に伝えられるようにドイツ研修からの帰国後に努力した。その結果として私の周りにいる人で社会参画を少しでも意識した人の背中を押すことができたと思う。

ドイツにおける、「若者の社会参画」をテーマとして日本の若者が最も学ぶべきことは「社会参画」は誰でも簡単にできることであると皆が実感することだと感じた。日本では社会参画やその中のボランティア活動、政治参画といった言葉のハードルはとても高い。現に私は、自分の所属するボランティア団体を設立するまで社会参画などという仰々しい言葉に見合うほどのことはできないと思っていた。ボランティア活動を始めた当初も自身の活動をボランティアと認識していなかった。自身の活動は「面白そうなこと」の延長でしかなく、この活動の定義などについてはあまり考えたこともなかった。そんな中、本事業への参加を契機にドイツでの研修を経て、私の視点が大きく変わった。ドイツでは、若者が社会に参加することが非常に身近な行動とされており、日常生活の一部として自然と取り入れられている。さらには社会参画を通してコミュニティとのつながりを深め、自分自身の生活を豊かにする手段としてドイツでは広く認知・理解されている。

この経験を通じて、ドイツでの社会参画の「身近さ」や「ハードルの低さ」を感じ取ることができた。帰国後、私はこの学びを活かして、周囲の人々にも同じ感覚を持ってもらえるよう努めた。私の活動を通じて、多くの仲間が社会問題に対して一歩踏み出すきっかけを持たせたことは大きな成果であると考えている。

具体的には、私の所属する団体の開催するイベントにおいてできる限り多くの若者の方に人前に立って自分の意見やビジョンを伝えてもらう機会を多く設計した。自分の意見を表に出す機会が少ないとよく批判される若者の代が何を考えているのか、何をしたいのかを伝えていく場合は日本において少ないとドイツからの帰国後により一層意識するようになった。これらの活動を進める中で、「社会参画は特別な人だけのものではなく、誰もが参加できるもの」というメッセージを強調した。

これらの取り組みにより、地域社会の中で「社会参画」への意識が少しずつ広がっていくことを期待している。社会参画という言葉に対するハードルはまだ多くの日本の若者にとって高いかもしれないが別に特別なことをしないといけないわけではなく自分の社会に対する想いを表明するだけでも十分である。人々が社会問題に対して積極的に声を上げるようになり、自分たちの力で変化を起こせることを実感できるようになれば日本も少しずつドイツのような社会参画意識の高い国へと近づいていくのだと思う。私はこれからも、ドイツで学んだ教訓を活かし、一人でも多くの若者が社会参加の魅力を理解し、積極的に行動に移せるようサポートしていく。

■今度行いたいこと (200字以内)

日本の若者の社会参画への意識を変えられるような活動を、規模を大きくしたうえで継続的に実践していきたい。今はまだアプローチ範囲が狭く限定的であるため、全国的な支援網を作れるようになりたいと考えている。

またドイツの方々にとっては社会参画が日常生活の一部であったように就職した後も続けて行っていきたい。そのうえで国内だけでなく世界を見据えた活動にも挑戦してみたい。

<p>■氏名：佐多結菜</p> <p>■所属団体：成蹊大学ボランティア支援センター学生スタッフ Seivior</p> <p>■活動内容 (50字以内)：大学生に向けたボランティア活動の普及や啓発のためのイベント企画・運営</p>
<p>■ドイツで学習したこと</p> <p>「若者の社会参画について」(400字以内)</p> <p>ドイツでは、国、州、市それぞれのレベルでボランティア活動や青少年の活動に対する補助金が出される仕組みがあることを知り、システムの日本よりも若者の活動がしやすい環境が整っていると感じた。子ども・若者コミSSIONナーのお話を聞いた際には、「若者が今後の社会を作るから、大人はそのサポートをする必要がある」というような、大人側が若者に対して持つ責任のようなものも強く感じられた。</p> <p>また、若者主体で行われている政治的活動が多くあることも、日本とは大きく異なる点であった。ドイツでは、小学生高学年頃から友達同士や家族間、近所の方など誰とでも政治の話をするのがあり、人によってはデモや自治体の議会に参加する。若い世代から自分の意見を政治に反映させるために積極的な活動が見られ、政治家側も若者の意見を取り入れるための場を提供していることもあり、若者側の社会参画への意欲とそれを受け入れる体制があると感じた。</p>
<p>■ドイツでの学習をどのように活かしたか。(1,200字以内)</p> <p>① ドイツで現地の方々のお話を聞き、日本とドイツでのボランティア活動への意識、活動のシステム、活動内容それぞれの違いが明らかになり非常に興味深く感じたため、卒業論文のテーマとして取り上げることにした。具体的には、ドイツでは学校での部活動があまりないことから、各自地域の団体に所属してボランティア活動や地域貢献活動を自発的にすることが当たり前とされていたり、連邦政府、州政府、各自治体、民間、公的など様々なセクションで金銭的なサポートが得られたり、キリスト教の信念に則ったボランティア活動をしていたり、日本にはないボランティア体制が存在していた。特にドイツの大学生においては、学生インシアチブを結成して大学内で積極的に活動をしていたり、消防団に所属して地域に貢献したりしている人もいるというのは印象的である。一方で日本では、多くの大学でサークルとしてボランティア活動ができる場は存在しているが、大半の学生がボランティアに興味がなく、ボランティアをしている学生＝“意識が高い”として一線引かれ、実体験としてもボランティアが身近に感じていない人も多いように感じている。金銭的にも、ドイツは学費が無料なのに対し日本では多額の学費や設備費が必要になるためアルバイトに時間を割く学生が多くなっている。これらのような観点から、日本とドイツにおける大学生のボランティア活動の比較というところで、今後も研究を進めていきたい。</p> <p>② 日本とドイツでの歴史観の違いを学び、塾講師としてのアルバイトで活かした。ドイツ団とのディスカッションを通して、日本では特に第二次世界大戦において被害の歴史を主に学ぶことが多く、日本の加害の部分は見えにくくなっていることが多いことに気づいた。例えばそういったことが現在の日韓関係の悪化に繋がっている部分もあり、政治的にも影響が出ていると思う。一方でドイツでは、ナチスが犯した罪はドイツ国民全体の責任であると考えている人も多くいて、現在においても反省の意識を持って負の歴史を後世に伝えていくべきという姿勢もみられた。そういった歴史に対する当事者意識を持つためには、歴史教育のやり方が大切で、学校の授業でどのように歴史を伝えるかが大きく影響を与えると考える。ただ、私は学校教育の現場に立つことはないの、塾講師として被害の歴史だけではなく加害の歴史も同時に伝え、偏った認識にならないように、また「受験のための歴史」にならないために伝え方を考えるようになった。自分自身としても、これから改めて歴史を勉強し直し、歴史理解をさらに深めていこうと思うきっかけにもなった。</p>
<p>■今度行いたいこと (200字以内)</p> <p>ドイツでの学生のボランティア活動の現状を見たことから、より自分自身のボランティアへのモチベーションが上がり、以前から活動していた学生への普及・啓発の部分に力を入れていきたいと考えている。具体的には、ボランティアを知るきっかけづくりとなるようなイベントの企画・運営に加えて、学内のボランティアサークル・団体との連携による学内ボランティア活動の活発化を目指していきたい。</p>

■氏名：島光佳乃子

■所属団体：国際ボランティア団体 BWP

■活動内容 (50字以内)：東南アジア諸国の教育問題に関して、特にラオスの初等教育の奨学金を通じた支援。

■ ドイツで学習したこと

「若者の社会参画について」(400字以内)

最も興味深かったのは、参画の定義と段階モデルである。自分たちが、青少年が参画できる場を形成する立場として何をすべきか、重要な視点を獲得することができた。研修参加前は、社会参画とは何かという問いに自分の言葉で答えることができなかつたが、研修を通して様々な形の社会参画を学び、私たち日本の青少年が今後すべき社会参画とは何か理解することができたように思う。参画の段階モデルは特に重要なポイントであると考え、参加と参画は区別し使い分ける必要があるだけで、常に高位な自治を求めることはしなくてよい。しかし全て自発的な参画であるべきで、強要があってはならない。年齢や能力で全てを決めることはせず、互いへのリスペクトを持ち若者の社会参画の場を形成していくことが重要である。

■ ドイツでの学習をどのように活かしたか。(1,200字以内)

事前研修、そして訪独を経て得た学びを、私は特に研究ゼミと所属団体で活かすことができていると感じる。

一つは先にも触れた参画の段階モデルである。弊団体は所属人数が多く、しかしミーティングに参加する人が一部のみであることが恒常的な問題になっている。また運営に携わっているコアメンバーのみが全企画の計画・実施を担っており、能動的に参画できる場が全てのメンバーに用意されていないことも改善すべき点として挙げられている。そこで参画の段階モデルを活用し、やる気のある人はより高次の参画、段階モデルにおける共同決定や自治に加わることができるよう体制を見直している。また、企画が終わるまで参画させることも重視するべきだと考え、ある程度参画させたら最後はコアメンバーが決定するという意識をしないよう意識している。これは所属ゼミにおけるグループ研究でも同じことが言えるのではないかと考え、ゼミに共有し研究への意識を高めることに活用した。複数人いるグループで合意形成をしたり作業したりするより、全て一人でやった方が早いと感じて、全員が研究に参加すらしていないという研究班が複数あった。その意識の改善の一助になればという思いで、見せかけの参画についての説明も行った。参画できるという事実と体験は、ドイツ団員や訪問したボランティア団体等から聞いたように高いモチベーションと何かを成し遂げるエネルギーになる。今後も参画する機会を作ることを意識して活動していきたい。

また、私が合宿セミナーで議題に出した多様性社会についてのディスカッションは、私が現在行っているジェンダーについての研究にとって大いに役立たせることができた。「多様性に寛容な社会は実現できるのか？」というアバウトな議題であったが、日独両国の同年代の人たちの意見を聞くことができ大変有意義であった。ここで知った「寛容のパラドックス」は、この研究において大きなキーワードになっている。少しセンシティブな議題であった分、哲学対話のような雰囲気の交流ができたことも良かった。このディスカッションのような場を作れるよう、研究に励んでいきたい。

他にも現地に行き身体で感じて学んだことや、様々な人との交流で得た学びが多くある。これらは今行っている活動や研究以外の場でも今後活かすことができると確信している。積極的に学んだことを活用し広められる人材として成長していきたい。

■ 今度行いたいこと (200字以内)

研修やディスカッションを通じて、団員の普段の活動に興味を持った。ドイツ団の中で訪問できた人たちは、所属している活動団体にいかに生き生きとしているか、どれだけ誇りをもって活動しているのかをのぞき見ることができてとても良かった。ぜひ他の団員が普段どのような活動をしているのかも知りたいと感じた。日本団も、話を聞いているだけでとても興味深い活動をしている人ばかりであった。今後交流があれば考えている。

■氏名：塚原 大翔

■所属団体：国立磐梯青少年交流の家 法人ボランティア

■活動内容 (50 字以内)：福島県内の子どもたちを対象に震災についての学習活動や自然キャンプなど、様々な体験活動のサポートをしている。

■ドイツで学習したこと

「若者の社会参画について」(400 字以内)

今回の研修で私の中の価値観が2つ変わった。それを学習したこととして記載しようと思う。1つ目はボランティアに対する価値観だ。私は、ボランティアはアルバイトに近いような自分のための個人活動だと思っていた。しかし、ドイツには社会奉仕年制度という制度があったことや、ドイツ団の活動が、議員やレスキュー、メンタルヘルス相談支援員といった、社会に直接関わる活動が多かったことから、ボランティアは社会奉仕活動だという考え方に変わった。ボランティアによってドイツの若者が社会に深く関わっているという印象を受けた。

2つ目は政治への関心の変化だ。ドイツ団との交流の際には政治の話題が沢山あがった。ドイツ団からは AFD という極右政党について、日本団では衆議院の解散についてなどだ。以前は興味のない分野だったが、この二週間で日常的に政治の話題と触れたことで、私は政治や社会に対して少しずつ興味を持つようになった。

■ドイツでの学習をどのように活かしたか。(1,200 字以内)

ドイツでの学習では、ボランティアと政治について新しい価値観を学ぶことができた。それをボランティア同士の交流などで個人的な経験談として広く伝えていこうと考えている。また、今回の研修でドイツのボランティア活動は、若者と社会をつなげる大切な役割があると感じた。マイセン群青少年フォーラムの活動のように若者の居場所を青年ボランティアが作ることで、いずれは若者自身でよりよい社会をつくれるようになるのではないかと思ったからだ。そして、今年度は法人ボランティアの報告会であるボランティアミックスキャンプや、全国の学生ボランティアが悩みや考えを話し合う第7回全国学生ボランティアフォーラムに参加する予定だ。こうした活動にこれからも積極的に参加して、いつか自分が主体となってボランティア活動を企画したい。

政治について学んだことは、現在通っている学校で活かそうと考えている。まずは、衆議院選挙に行かないという学生が多かったので、仲の良い同級生を中心に期日前選挙の参加を促した。具体的には、ドイツで知った政治の話をしたり、選挙区の政治家が掲げる政党や、期日前選挙のやり方を一緒に調べたりして、少しでも選挙に行きやすいようにサポートをした。その結果、はじめは「投票に行っても意味がない」「予定があって忙しい」といていた学生が自分の考えを持って投票に行ってくれた。次に、ヨーロッパの極右政党が台頭してきていることや、日本国内の政治家が不祥事を起したことなどの政治的なニュースをクラス内で積極的に話すようにした。私が研修中に関心を持てたように、日常的に政治の話題を話すことで、周囲も少しずつ興味を持ってくれるのではないかと考えたからだ。今後はクラス内で学習成果報告会を行い、その中で民主主義について自分たちで考える取り組みをしようと考えている。また、ドイツで学割を使った時に困った経験から、学生証にローマ字表記を追加してもらえるか学校へ相談しようとも考えている。ドイツでの学習を活かして、私が今できる小さな範囲からよりよい社会に変えていこうと強く思う。

その他に今回の研修では自分の足りない部分を沢山知ることができた。特に著しく感じたのは英語力の足りなさだ。入国審査の際に英語が全く聞き取れなかったり、ドイツ団との交流で聞き取れた英単語の意味がわからなかったりして、自分の英語能力の低さを改めて痛感した。繋がりを持てたドイツの方々との先も連絡を取れるように、まずは検定や資格取得を目標として英語の学習に力を入れようと思う。

■今度行いたいこと (200 字以内)

まずは、今回学んだことを活かして来年度から始まる卒業研究を行いたい。そこで若者の社会参画をサポートできるようなシステムを開発できればと思っている。そのために来年度はボランティア活動を控えて、学業に集中するつもりだ。

その後は、仕事をしながら趣味としてボランティアを続けたい。雇用契約が必要なく、様々な経験を積めるボランティア活動をこれからもずっと続けていきたい。

■氏名：野口陽菜

■所属団体：羽田航空少年団

■活動内容：小中高生を中心に団体活動を通じて体験や学ぶ機会を作り航空の知識を深める。

■ドイツで学習したこと

「若者の社会参画について」

ドイツでは若者が社会参画をすることのできる環境が身近に沢山存在すること、若者の政治意識の違いについて学んだ。私は、社会参画は政治にかかわることだけだと思っていたが、他にも参画の仕方があることを知り学校や家庭など身の回りのことから参画できることが分かった。日本では高校生以下が社会参画する機会がかなり少ないことが改めて思い知らされた。日本はドイツではほぼ当たり前なボランティア活動に参加することや政治に興味を持ち触れる機会が少ないが、ドイツでは周りから認められていて制度が充実していると感じた。またこのボランティア団体でも政治に触れて活動していると感じた。これまで私はボランティア活動と政治は関係ないものだと思っていたがドイツでは生活に民主主義が根づいており、ボランティア団体でも政治教育を行っており驚いた。その教育方法としてディスカッション形式が用いられることも学んだ。

■ドイツでの学習をどのように活かしたか。(1,200字以内)

私は帰国してからの数か月間では、ドイツで得たことを活かせなかったと感じている。若者がもっと社会に参画した方がよいことや政治に対する意識は変わったが実際に行動に移すことはかなり難しかった。原因として、私が通っている高校、所属しているいくつかの団体でドイツ研修報告会を行う機会をいただいたが、まだ高校生の私がドイツで学んだこと活かそうと行動に移すには大人に協力していただかないと不可能であることを痛感した。また自分の具体的なプロセスが見いだせていないことである。

私がドイツで学んだことを発表し、それを踏まえて意見交換を同世代と行うことができたが、同意はしてもらえずその後の展開には至らなかった。日本では学校等でディスカッションを行う機会が少ないので同世代の意見を聞いたことはとても貴重な経験となったが「もし有償ボランティアがあり自分への見返りがあったとしても人のために善意をもって行動できない」と言われた。ホームステイやディスカッション、団体訪問をする中でドイツでは学校や家庭で参画する機会や自分の意見を発信していく場が幼少期から多くあるため自発的に活動している学生が多いと感じた。日本もそのように根本的に教育改革出来たらいいなと思いつつ、自分の価値観を押し付けずに若者が自分の意見発信していく場を作る難しさも実感し、ドイツ団の方が「ボランティアは自分の生活を彩るものだ」とおしゃっていたようなマインド形成をできたらいいなと改めて感じた。

もう一つ所属している団体で小中高生、大学生、保護者の前でお話する機会を得た時の保護者の方が自分からやりたいことを見つけて自発的に行動するにはどうしたらよいかと質問をいただいた。私は中学生以下と関わることが多い。だからこそ活動の一環として普段から自分の意見を誰にでも伝えられる場を作り、うまく引き出せ導けるリーダーになりたいと思う。

これを機にドイツで学んだ一度相手の意見を尊重し受け入れることを大切にして、同世代と意見交換をする場を作り発信していきたいと思う。実現につなげるには次世代や同世代に伝えることも大切だが、大人や今その環境を作っている人に伝えることも大切だと思った。

発表の場で政治分野のことで興味を持ってくれた人はいなかった、その為私がドイツに行って同世代と話す場、他国の政治を知ることで自国の政治の見形が変わり表面的に見ていた部分をより詳しく知ったほうが良いのではと思えるようになったように、誰かと話す機会や学校教育の場では習わないことを聞く機会があれば興味を持つのではないか。私の発表で子どもたちから人気だったのはコーヒープレイクが存在することだ。このように興味を持ったこと好きなことを通じて学びの発展、発言できることが理想的だと感じた。

今後は、ハードルは高いが若い世代が自分身の回りの環境以外のことにも興味を持てる機会を作ってみたいと思う。質問をするときは、YES or NO で答えられない質問をすることも相手の意見を引き出す一つであると思った。

■今度行いたいこと

今所属している団体での活動は続けていきたいと思う。またドイツで体験をしたことによって自分が前とは違う興味を持ったことに挑戦をしていきたい。

今所属している団体では自分たちの意見を主張し、若者が参画する機会がかなり少ないように私は感じたためそういった機会を増やしていきたいと思う。また小中高生が自発的に活動できるように青少年育成団体がどのようなものなのか意味を見出して活動していきたいと思う。

■氏名：福元 萌

■所属団体：京丹後市夢まちづくり大学間人地区移住者促進活動

■活動内容 (50字以内)：京丹後市間人地区を中心に地域課題に取り組み、地域の持続的な発展を目的に様々なイベントを行っている。

■ドイツで学習したこと

「若者の社会参画について」(400字以内)

ドイツでは若者の社会参画が日本と比較した際、かなり進んでいることが判った。ドイツでは制度として勤労奉仕活動への若者の積極的な参加を促しており、若者自身もこれらの奉仕活動に参加することによって、その後の大学入学時の優遇措置が受けられる為、自発的動機が生まれやすいと思った。現在、そして将来の社会では様々な事象に対する物差し(基準)を持った、多角的な人物が求められている為、ドイツのように制度化することで若者の社会参画を促す環境は日本も参考にすべき点であるように感じた。

また、現地の政情は近隣のフランスなどの国々と同様に社会全体として右傾化している事と、その社会の右傾化に対する民衆の警戒、そして、民衆の間でも政治トピックへの向き合い方の違いから分断が生まれていることが判った。これらの問題は第二次世界大戦期とその後の冷戦期を含む長期的なドイツの歴史から生まれた歪が形骸化したものだと感じた。

■ドイツでの学習をどのように活かしたか。(1,200字以内)

ドイツでは若者が積極的に意見発信する環境があった。この背景には勤労奉仕活動の制度化や若者向けのサミット(カンファレンス)などがオフィシャルな形で開催されている点がある。また、街中でのデモ活動への積極的な参加など、若者が自発的動機に基づいて社会活動に参加していた。一方で、日本では若者が社会活動への参加する機会が少なく、若者自身も内発的動機に基づく社会参画自体がドイツと比較した際に低く感じる。これらのドイツと日本の若者の社会参画への違いは国全体の政治、経済を含む社会情勢が影響している為、一概に賛否を下すのは難しい。しかし、ドイツでの様々なワークショップを通じて、大きな違いであり問題点だと感じた事項はドイツの若者は自国(ドイツ)の政治(社会)への意見発信をすることで国が少しでも変わるのではないかという希望を持っているのに対し、日本の若者は自分たちの意見発信が政治(社会)への影響が全くないと感じている違いだ。日本の若者全体に政治(社会)への無気力感が社会参画への内発的動機付けにも影響し、結果的に若者の社会参画への低さ、無関心に繋がっていると感じた。

日本では長年、政治への停滞感が国全体として漂っている。この傾向は若者だけでなく全世代に共通している問題点だ。特に、若者は相対的な人口比率を鑑みた際、他世代に比べてより自分たちの意見が政治(社会)に影響を及ぼしづらいと考えている。これらの課題は若者自身の情報、意見発信の少なさを一面的に課題として批評するのではなく、社会全体として若者をはじめとする、相対的少数派の意見を汲み取る姿勢が求められている。

その上で、ドイツでの研修での様々な経験や学びから感じた前述のような課題を踏まえ、私自身は若者世代と他世代との意見交換の懸け橋となる役割と、若者自身が意見を発信することに意味を見出せる環境を創出できるような活動(行動)をしていきたいと考えている。現在、私が所属している京丹後市夢まちづくり大学プロジェクトでは自分たち世代の学生だけでなく、高齢者世代が多くを占める現地住民をはじめとする様々な世代との『地域が抱える課題』というトピックのもとワークショップなどで対話を行ってきた。これらの経験を活かし、世代間の対話の輪をより広げた活動に目を向け、私自身も関わっていきたいと感じている。また、若者が意見発信を出来る環境の創出という面ではドイツではオフィシャルに設けられていた面があり、この点での日本の環境不足を補う働きかけが重要になると考えている。その一方で、現在ではSNSの発達などにより、以前と比較し容易に意見発信できるため、情報社会が発達した現代の特性を活かした情報発信の場を創出したい。

■今度行いたいこと(200字以内)

前述の通り、ドイツの研修で感じた日本とドイツの違いに基づいた若者の社会参画の機会を促進する活動を今後は積極的に行っていきたい。特に、日本では政治への希望感の低さが課題だと感じた為、この課題を解決できるような世代間の『対話』の場を創出したいと考えている。また、日本の若者が政治への関心を高められるようなワークショップを開催するとともに、SNSなど現代型の意見発信の形で社会参画していきたい。

<p>■氏名：藤田 暖生 ■所属団体：英数学館高等学校インターアクト部 ■活動内容 (50字以内)：地域への奉仕 (ボランティアや募金活動など) をしながら他校や地域の人との交流を行っている</p>
<p>■ドイツで学習したこと <u>「若者の社会参画について」(400字以内)</u> ドイツと日本の若者が社会参画に対して抱く意識の違いが非常に印象に残った。特に、ドイツの若者が自らの意見を積極的に表明し、社会に反映させようと行動している姿勢が印象的だった。ドイツでは、ボランティアが社会参画の手段として広く認知され、若者が社会問題に関与しやすい環境が整っていた。ボランティアは社会参画の窓口であり、若者たちの協力によって積極的な参加が実現されており、特に抵抗感なく、自分の声を届ける自然な手段として実施されていた。ドイツの若者が率先してリーダーシップを発揮する姿勢は印象的だった。さらに、教育面でも若者が主体的に意見を述べ、議論を通じて考えを深める環境が整っていた。この経験から、今後は小さな行動から社会参画に取り組み、他者との協力を大切にしていきたいと感じた。</p>
<p>■ドイツでの学習をどのように活かしたか。(1,200字以内) ドイツで学んだ若者の社会参画について、所属する高校のインターアクト部でその成果を報告した。ドイツの若者たちは、ボランティアを通じて積極的に社会に参加し、自分たちの声を届けており、この姿勢に深い感銘を受けた。日本では、若者の社会参画は選挙に限られることが多いが、ドイツでは日常の行動や活動を通じても社会に影響を与えることが重視されており、私たちも同様の考えを持つべきだと感じた。 報告会では、ドイツで学んだ内容を一方的に伝えるのではなく、部員たちとの対話を重視した。まず「社会参画は選挙だけでなく、日々の活動を通じて社会に影響を与えることだ」と説明し、選挙権を持たない人でも参加できる方法について強調した。また、選挙権の重要性にも触れ、選挙に向けた準備として社会問題に関心を持ち、自分の意見を形成することが重要であることを伝えた。ドイツでは、政治教育が人々の関心を育て、行動に移す力を培うことを目的としているという考え方を学び、これを部員たちに共有した。 また、ドイツのボランティア文化にも触れ、日本とは異なり、若者がボランティアをネガティブに捉えず、声を上げる自然な手段として受け入れている点を紹介した。このような活動を通じて、若者であっても社会に参画する力があることを部員たちに伝えた。また、日本の若者が感じる無力感や社会参画に対するハードルについて話し合い、それを解消するためにどうすればよいかを議論した。 さらに、私は日本の若者がもっと積極的に社会参画するための提案も行った。例えば、インターアクト部の活動において地域の問題を話し合い、その解決策を考える場を設けることで、部員が主体的に社会参画に関われるようにすること、また、社会参画は政治に限らず、家庭や学校での小さな行動もその一部であることを強調した。地域でのボランティア活動や学校のプロジェクトに参加することも社会参画の一環であり、身近な行動が社会に影響を与えるプロセスであると伝えた。 報告会後には、部員たちが自ら考え、行動できるプロジェクトを立ち上げるためのディスカッションを行い、全員が意見を出しやすい雰囲気を作るよう努めた。こうしたプロセスを通じて、部員たちが自分たちの活動に自信を持ち、社会参画への意識を高めることができたと感じている。 今後も、ドイツでの学びを活かして、インターアクト部の活動を通じ、部員たちが主体的に社会参画に取り組み機会を増やしていきたいと考えている。社会に対して自分たちの声を届けるためには、日々の小さな行動から始めることが大切であり、その積み重ねが大きな変化を生むことを、部員たちと共に学び続けたいと思った。</p>
<p>■今度行いたいこと (200字以内) ドイツでは、ボランティアを通じて意見を表明することが一般的だった。私は日本においても若者がもっと積極的に社会参画できる環境を整える活動を実施したいと考えている。特に、高校三年生の私は社会参画する手段として選挙権を持った。選挙権を通じた社会参画の重要性を啓発し、政治に対する若者の関心を高めるため、学校や地域で政治の重要性や選挙についてのワークショップを行いたいと思う。</p>

■氏名：古本 杏奈

■所属団体：①Language Exchange Partner ②留学生お助け隊 ③兵庫教育大学

■ドイツで学習したこと

「若者の社会参画について」(400字以内)

私がドイツで得た大きな学びとして、まず、若者の「参画」の機会を大人が作ることの大切さがある。自身の意見が反映されるという成功体験は、若者にとって自信や自己肯定感に繋がる契機になると学んだ。家庭や学校現場で大人が若者の意見に耳を傾け、それを取り入れ様々な決め事に反映させようとする姿勢を持つことが重要だと考えた。

次に、負の歴史の伝承を行う必要がある。日本では、被害の歴史については詳しく学ぶが、加害の歴史については学ぶ機会が少ない。歴史的事実を知ることや、現行の様々な制度に戦争での経験がどのように活かされているのか、という歴史との繋がりを知ることの大切さを学んだ。

最後に、政治やメディアへの関心を高める必要がある。日本では政治やメディアに対する関心の低さが課題としてあることが分かった。まずは若者に、政治・メディアが自身の生活にどれだけの影響を与えるものなのかを知ってもらう必要があると考えた。

■ドイツでの学習をどのように活かしたか。(1,200字以内)

私はドイツでの学びを通して、教育における「参画」や「意見の反映」の重要性を深く実感し、所属団体の中でも特に、留学生お助け隊でのイベントと兵庫教育大学での教育実習において、その経験を活かすことができたと感じている。

まず留学生お助け隊では、参加者の希望を反映させた企画作りに活かしている。ドイツで学んだ「意見を反映させる参画」の重要性を考え、私を含む3人の学生で企画運営を行う際に、参加者にその日のイベント内容の感想や今後の要望を訊く機会を設けるようにしている。また、参加する学生の意見をベースにイベントの細かい内容を決定するようにもし、プロジェクトの企画・運営を行う私達3人の学生だけでなく、参加者である学生にもイベント作りに参画してもらうことで、より充実したイベントになるよう心がけた。ドイツでの経験があったからこそ、参加者の意見がどれほど重要であるかを再認識し、実践に活かすことが出来たと思っている。

次に兵庫教育大学において、帰国後すぐに実施された教育実習で学びを活かすことが出来たと感じている。具体的には、私は「意見が反映されるという参画の『成功体験』を生み出すために、教員としてできることは何か」を計4週間の実習のテーマとして掲げた。このテーマをもとに、実習中様々な先生の授業を参観し、どのように児童の意見を授業に反映しているのか、反映させるために現場の先生方が具体的にどのような板書や発言等を行っているのかを観察した。そしてその上で、私自身の授業実践では、児童から出た発言を大切にすることを意識した。特に、児童の発言で進む授業や、児童の発言が有用となるような授業の組み立てといったものを目指していった。授業で学ばせたい目標や授業内容とは別に、子供達が授業を通して自然に学んでいた、身につけていた、となる裏カリキュラムのうちの一つとして、発言することに対する意識の変化というものを組み込むことで、少しでも自信を持って発言できる児童や、自分の発言は有用なんだと感じる児童が増えたら本望だと思いながら授業を展開していった。授業の中でできるだけ多くの児童の意見を拾うよう心掛けたり、発言が苦手な児童でも発言しやすいよう、発言の場を工夫したりした。結果、初回授業時よりも3回目の授業の方が発言が積極的に出て、児童自身が授業に参画している感覚を持ち、その結果、授業への主体的な参加が促されたことが、授業の雰囲気や振り返りシートなどから見とれた。ドイツでの学びは、私の教育観に大きな影響を与えた。特に、意見の反映や参画の重要性を実感し、それを留学生お助け隊や兵庫教育大学での実習で活かすことができた実感している。

■今度行いたいこと(200字以内)

今後行いたいこととしては、若者への政治やメディアへ関心を持ってもらえるような機会の設置と、来年の5、6月にある高等学校実習での学びの実践の大きく二つがある。両方において、自身の感じた関心の低さへの危機感を伝達すると共に、その手段の一つとしてドレスデン工科大学のゲーミングも活用していけたらと考えている。また私は英語での会話が可能であるため、①等の他国の人との交流の場での学びのシェアも行っていきたい。

■氏名：松山玲子

■所属団体：淡路エリアマネジメント（学生会員）、まちワークグループ早稲田

■活動内容（50字以内）：神田・淡路町地域の活性化に取り組む、早稲田地域の商店会や地域の子供と交流して早稲田のまちづくりを行う

■ドイツで学習したこと

「若者の社会参画について」(400字以内)

ドイツの若者が政治に対して高い関心を持ち、積極的に政治参加する姿勢に驚いた。これは単なる関心を超え、政治を「自分ごと」として捉えていたことが要因であると思う。ボランティア活動に積極的な若者も多く、自身が属する地域や団体への愛着が強い点が日本との違いとして感じられた。この意識が、政治参加にもつながり、社会や地域への貢献を重視する姿勢を支えているのだろう。私は、ドイツでの経験を通じ、日本でも若者が自分ごととして政治や地域活動に参加、参画することが求められると実感した。さらに、政治についての会話が日常的に行われることも印象的であった。このような日常のコミュニケーションが政治への関心や社会参画への意欲を自然に育んでいることを実感した。その背景には、国民性はもちろんのこと、教育課程において政治を深く学べる体制があることが要因であろうと感じた。日本でもこのような社会づくりが重要であると強く感じた。

■ドイツでの学習をどのように活かしたか。(1,200字以内)

1点目に、ドイツでの学びを経て、日本に戻ってからは、特に神田地域への愛着を深め、地域のイベントや地域活性化に関わる活動に積極的に参加するようになった。たとえば、神田地域のボランティア活動に参加するだけでなく、OB会でまちづくりの現場に携わっている方々から生の声を伺うなど、地域の課題や取り組みを自分ごととしてリアルに捉えるように努めている。この経験を通して、地元の人々との結びつきをより強め、地域への愛着が一層深まった。早稲田地域でも、学校祭でサークルとして出し物を出す際に、サークル活動を通じて地域の商店会の方々と協力し、地域活性化を目指した企画を実施している。また、商店会とのコラボで行ったイベントでは、地域の魅力を発信するブースを出展し、商店会の方々とコミュニケーションを取ることができた。活動を続ける中で、顔なじみの店が増え、自分の大学生活が地域に根ざしていることを実感している。ドイツでの経験がきっかけとなり、早稲田地域を、ただ大学のある街として捉えるのではなく、自分の自発的な行動次第で、大学の枠を超えて地域と深く関わることのできる街であると捉えることが可能になった。

2点目に、ドイツでの交流を通じて、政治学への関心が高まった。特に地方自治に興味を抱き、現在は地方自治に関するゼミに所属した。自身の身近な地域での政策内容といったミクロな視点と全国一律で実施されている政策内容といったマクロな視点の両観点から、地方自治についてこれから学んでいく所存である。他にも、ドイツでの経験をきっかけに、他国と比較しながら日本の政策を考察することの重要性を感じ、「比較政治学」の授業を履修することに決めた。異なる国の政治状況や制度について学ぶことは、日本における若者の政治参加を改めて考えるきっかけとなり、国際的な視点から日本の政治に対する理解を深めることの一助となっている。さらに、ドイツでは日常的に政治について話す文化があり、日本との違いを強く感じた。ドイツ団の方々は、日常会話の中で政治や社会について自由に意見を交換することができたことがとても新鮮で、日本でももっと気軽に政治について話せる環境が必要だと感じるようになった。この経験を通じて、日本の風潮にとらわれずに自分の意見を発信し合う場の大切さに気づくことができた。

3点目に、異国の地で生活し、英語を使ってコミュニケーションを取る経験を通して、自分に自信がついた。最初はホストファミリーとの交流に特に不安を感じていたが、温かく受け入れてもらい、拙い英語でも意思疎通が図れたことで、思っていることを積極的に伝えようとする大切さに気づいた。これによって得た自信は、今後の地域活動やボランティア活動にも役立つはずである。ドイツでの学びを生かし、日本での今の活動を通じてさらに自分自身を成長させていきたいと強く感じた。

■今度行いたいこと(200字以内)

今後は、ドイツで学んだことをもとに、神田や早稲田地域での活動をさらに活発化させ、若者の地域参加を促進する仕組みづくりについて考えて行きたいと思う。特に、若者が自分ごととして地域や社会に関わることで、地域を持続可能な発展に寄与できると考えている。また、地域活動の一環として、政治や地域課題について若者同士が自由に話し合える場を作り、参加意識を育む取り組みにも挑戦していきたい。

<p>■氏名：横畑 あゆな ■所属団体：NPO 法人国際自然大学校、溝口神楽団 ■活動内容 (50字以内)：子どもとのキャンプボランティア、広島神楽の伝承・継承</p>
<p>■ドイツで学習したこと <u>「若者の社会参画について」(400字以内)</u> ドイツでは若者が政治に対する関心が強かった。それは政治教育だけではなく、歴史教育にも力を入れていたためではないかと感じた。ドイツではナチスが独裁していた歴史があり、ドイツの若者はその歴史に向き合うとともに、加害と被害両方の視点でフラットに歴史について学んでいた。歴史に対する認識が、今の政治への関心に繋がり、若者の政治参画が盛んに行われていることを学んだ。また、そのような教育がボランティア活動や社会奉仕年などの社会参画の積極性に繋がっているのではないかと感じた。日本では若者の政治への関心が低く、歴史教育や政治教育に多くの課題がある。歴史教育では被害の側面が多く取り上げられ、政治教育は中立的な立場をとろうとするあまり、そもそも現在の政治を教えることに抵抗感を抱いている教員が多く、社会に繋がった政治教育はなされていない。ドイツの教育を知り、日本でも参考にできる点があると感じた。</p>
<p>■ドイツでの学習をどのように活かしたか。(1,200字以内) まずドイツでの研修を振り返ってみて、自分なりに何が一番学びになったのか、これからその学びをどう活かして行くか整理した。すると、教育面においてドイツの教育が日本でも参考にできる点があると感じたため、大学で教師を目指している学友や大学の先生などにドイツでの成果発表を行い、学校現場でどのように生かしていくことができるかディスカッションを行い、学んだことを深めた。その中で政治教育について焦点を当てた。日本では先進的な政治教育が躊躇われているため、実際の各党の政策について学ぶ機会はほとんどない。現在の社会の政治について一切学ばないことは、主権者としての権利を放棄することに繋がってしまう。そのため、学校現場では主権者を育てるような教育をすることが大切だと考えた。そのため、どのように政治教育を行えば中立的な立場で、子どもたちに政治を触れさせることができるか考えた。また、政治の中身を教えるだけではなく、子どもの声を聴き集団の中で考えて働きかける機会を設けることも主権者を育てる教育であり、社会に出た時に社会の一員として働きかける一人を育てることができるのではないかと考えた。それについては、ドイツでの研修を行う中で、日本では学校で子どもが自ら動いて社会集団に参画する機会が少ないのではないかと気づいたために考えられた。 そのため、研修後のボランティア活動ではなるべく子どもが自ら働きかけることのできる機会を設けた。例えばキャンプで宿泊する際に、寝る準備や夜ご飯の支度、お風呂などチームやるべきことがあった時、大人がすることを指示するのではなく、子どもたちが自分たちで働きかけて計画的に活動に取り組むことができるようにした。大人がいるからどうにでもなる環境ではなく、子ども自らで考えて自分たちの生活を作り上げていく環境が主権者教育において必要な要素だと感じた。またこの研修後に行った小学校での教育実習においても、主権者教育について焦点を当てて、授業づくりをしたり子どもに接したりした。例えば、授業にグループワークやペア学習を組み込み、各々が自分の役割をもって主体的に学習できるような環境づくりをした。その中で、教師が子どもに教えるという受動的な学びではなく、集団で学び合う形を作ることで、子どもたちは自分の考えを持ち、それを他者にぶつけていた。そのような集団での学びは、大人になった時の社会の関わり方に影響するのではないかと考えた。学校でも学びを通して、子どもたちが将来主権者として日本社会をより良くしようと働きかけることのきっかけにしたい。 このように大学でディスカッションを通してドイツでの学びをより深めたり、ボランティア活動や教育実習で子どもたちに主権者教育に焦点を当てた指導をして実践的なものにした。これからもこの研修の学びを活かすことのできるチャンスが多くあるため、この学びを生かしていきたい。</p>
<p>■今度行いたいこと (200字以内) 教員になった際、この学びや経験を子どもたちに教えたい。子どもたちに目で見て感じさせることの大切さを伝えるとともに、海外に出る経験は自分の価値観を広げ、見識を広めることができることを伝えたい。また、今回ドイツの若者やボランティア団体とつながったご縁を活かして、オンラインで日本のクラスとドイツの人とをつなげて歴史や文化の違いについて交流し合う授業を展開し、多様化に重点をあてた授業実践を行いたい。</p>

7. 成果と課題（団長 樋口 拓：青少年教育研究センター副センター長）

ドイツにおける若者の社会参画と民主主義に触れる、異質と馴化の交差点

社会参画をテーマとした2週間にわたるドイツ訪問研修は、参加者各々が“異質馴化—馴質異化”の自問自答を繰り返す、非常に意義深いものであったと思います。異質な価値観や制度に触れつづけることで、自らに当たり前のものとして馴化する。また、馴れ親しんだ同質な物事を異質の視点から見つめ直し、新たな価値を見出す。この二つの往来の繰り返しが絶えず行われ、様々な感情を伴いながら過ごしたのです。この経験は、彼らの明るい将来に大きな影響を与えたと期待しています。

さて、学生達はドイツの生活やボランティア活動、政治、歴史、教育等について多くの発見と学びを得ました。この詳細については、個人のふり返し頁、彼らによる成果発表会報告頁に譲り、本稿では、彼らの発見と学びの成果と背景を引率者の視点から課題と併せて、掘り下げた考察を試みます。

まず、学生達は、労働者の権利を確実に守る仕組みが、環境への配慮とともに日常生活の中に根付いていることに気づいたといいます。2週間という長期の現地滞在の生活体験で得た重要な視点であり、観光旅行では気づけない内容でしょう。この気づきの本質は、労働者の権利担保が民主主義の根幹の一つだということです。日本国憲法では労働三権が明記され、その精神には人権の尊重、民主主義の職場浸透、市民の政治参画機会創造が含まれていると考えます。働き方改革が叫ばれる今日、このドイツの実像は、働き方改革のその先に何を見るのかを考える機会になったと史料します。

また、ボランティア活動については、日本のそれと定義や価値観、制度面でのサポートが異なる点を多々見出しました。ドイツでは若者が、地域社会の課題解決に貢献するために団体活動に参加し、その活動が何らかの社会実装につながる中で自らの成長も実現していることに気づいたとしています。ドイツの場合、身近な地域の社会課題解決を起点に発足した団体で活動している点が特徴で、私はその背景に政治や歴史に関する国民の関わり方が関係している可能性を見ました。

政治に関しては、ドイツの若者は政治に高い関心を持ち、家族とも友人とも自由に意見交換を行い、そのための情報の透明性が確保されている点を見出しています。更に、歴史においては、教育の場で歴史を具体的かつ主観的に理解し、ディベートを通じて社会への関わり方を学びますが、日本では事実の暗記にとどまりがちであることから、歴史を具体的に理解し、過去の過ちから学ぶ姿勢を育てることの重要性が指摘されました。こうした背景を持つドイツの団体スタッフや学生は対話能力に優れ、日本人学生も当初は圧倒されていたようです。伝えたいことの表現、発言の勇気が持てずに悔しい思いをしていたことを感じましたが、対話による価値創造を体験することで徐々に積極的な姿勢へと変化しました。この例のように、“対話すること”の意味を体験的に学ぶことは政治・歴史教育の両面で、また社会参画という観点からも重要なのだと気づかされた場面でもありました。

さらに、彼らはメディアリテラシーの重要性も指摘しました。研修中に、異なる他者を排除し自国優先の政策を掲げる政党の台頭という民主主義を脅かす事態を目の当たりにしたのです。彼らの支持者による、ラーベンスブリュック追憶の場所（ナチスによる強制収容所跡地）の否定街宣やナチスの所業を肯定する発言にも遭遇しました。日本ではこの選挙結果を「ドイツにおける若者の右傾化」と報道されましたが、現地の方々の話やデータ、報道からはその事実は確認できませんでした。若者層の支持率が一定程度あるのは事実ですが、それよりも中高年齢層の男性に多いのです。彼らは東西ドイツ統一後の民主主義教育を義務教育として受けていないことが背景にあるのかもしれないと推察しました。同時に、一定程度の若者はこうした動きに否定的であること、右傾化防止に向け社会の様々な構成団体が各々の特徴を活かして活動していることも知り

ました。これら現地の実体験も、メディアとの向き合い方を考え、学ぶ機会になったと推察します。

ここまで参加学生達の気づきを引率者の視点から考察しましたが、全体を俯瞰してみると、それは、彼らの発見が個別に存在するのではなく、相互に関係し合い、有機的に繋がって社会を構成しているのでは、という点に思い至りました。学校での教育が政治参画意識や歴史認識を育み、家庭や社会が対話を通じて実践に結びつける。先生と生徒、親と子だけでなく、ボランティア活動を通じた異年齢・異集団の人々との交流が促され、その活動が施策・政策や社会実装として具現化し自己実現につながる。このような関係性が、例えば労働者や環境への配慮、ボランティア活動への参加の仕方等という一例に表れているのではないかと、ということです。ここまで成果の掘り下げを試みましたが、次に課題を二つ提起します。

一つ目は、日本国内での事前研修の充実です。ドイツの教育や政治体制、国民の関心や関わり方、訪問予定先の団体について事前に専門の見地から学ぶことで、現地での学びを深め、意見交換をより充実させ、理解が促進されるでしょう。また、過年度参加者が自身の経験を活かして事前研修に参画することで具体的イメージが創られることとなり更に効果が高まることと思料します。

二つ目は、帰国後に参加できるプログラムの提供です。本研修を活かし、学校での学びを実践し、実践を学校の学びに結びつけるためには、社会教育が重要です。私たち青少年教育施設の役割として、例えば次のような機会を提供することが考えられます。①多様な価値観の尊重：異なる文化や背景を持つ人々との交流を促進し、多様性を尊重する姿勢を育む。②主体的な社会参画の推進：学生が自ら課題を設定し、考え、行動する力を養う。③メディアリテラシー教育：情報を正しく理解し、批判的に考え、発信する力を育む。これらの体験をすることは、若者が継続的に異なる価値観に触れ、自らの活動を顧みる“異質馴化—馴質異化”の自問自答を繰り返しながら社会参画を果たしていくことが期待できます。私たち青少年教育施設の役割は、こうしたプロセスを支援し、民主主義を守り育てることでもあるのだとの考えに改めて至ったことは引率者としての成果です。

最後に、この研修をご準備いただき、現地での指導、日本からのサポートを頂いたすべての皆様に、そして、当研修に参加し様々な気づきを与えてくれた学生達、副団長のサポートに改めて御礼申し上げます。

受入事業報告

1. 参加者名簿

	氏 名	活動所属団体
		職業・教育課程
団長	アンドレ・ドーブリヒ	登記社団ザクセン州青少年余暇施設連絡協議会
	Andre DOBRIG	研修・相談・事業部門担当教育主任
1	アーロン・ベアンシュテンゲル	登記社団チェスクラブ・ディオゲネス 1977
	Aaron BERNSTENGEL	青少年担当役員・副理事長
2	アンナ＝マリン・ビショフ	公益有限会社オストファーレン「レーベンスヒルフェ」家庭支援サービス
	Anna＝Malin BISCHOFF	大学生（社会福祉学専攻）
3	クリストファー・チアヴィンスキー	ボン消防団バート・ゴードスベルク消防隊
	Christopher CERVINSKY	救急救命士の職業訓練開始予定
4	ソフィー・ヘアマン	インゴルシュタット市青少年連合
	Sophie HERMANN	大学進学予定（教職課程）
5	ベリンダ・カーヴェ	【U25】ベルリン 25 歳未満オンライン自殺予防相談（ベルリン大司教管区カリタス連盟）
	Belinda KARWE	大学院生（臨床心理学・心理療法修士課程）
6	ヨンネ・オーピッツ	①ザクセン州山岳救助隊 ②学生水難救助隊
	Jonne OPITZ	教育分野のボランティア年（自発的社会活動年制度）

7	マータ・ルムベアク	①リーザ市居場所型ユースハウス（公益有限会社ア ウトロー） ②登記社団 faranto
	Martha RUMBERG	大学生（国際ビジネス専攻）
8	ケン・サグラム	ゲオルク・ブーフ・ハウス・ユースセンター
	Can SAGLAM	大学生（社会福祉学専攻）
9	セルヴィジャン・シャヒン	①ノルトライン・ヴェストファーレン州能力開発セ ンター ②欧州におけるルアポット（ルール工業地帯）
	Selvican SAHIN	大学生（法学専攻）
10	マクシミリアン・シュパイ デル	①マイセン市ユースフォーラム ②ラーデボイル市役所 洪水対策 ③ラーデボイル市議会
	Maximilian SPEIDEL	大学生（経営学専攻）



日独学生青年リーダー交流事業ドイツ団

2. 日程

日付	場所	時間	プログラム
8月28日 (水)	ドイツ	午前	ミュンヘン国際空港 発
8月29日 (木)	大阪	午前 午後	関西国際空港 着 大阪フィールドツアー 自主研修
8月30日 (金)	奈良	午前 午後	奈良へ移動 オリエンテーション (全体/地方) 体験：曾爾プログラム (曾爾高原ハイキング) ※ホームステイ代替プログラム
8月31日 (土)	奈良	午前 午後	体験：日本の伝統文化 (昔遊び体験) 体験：曾爾プログラム (木のスプーン・フォーク作り) 体験：日本食調理 ※ホームステイ代替プログラム
9月1日 (日)	奈良	午前 午後	体験：日本の伝統文化 (茶道体験) ※ホームステイ代替プログラム 交流会 (ホストファミリー) 体験：日本の伝統文化 (長谷寺訪問)
9月2日 (月)	奈良	午前 午後 夜	訪問：曾爾村立曾爾小中学校 訪問：曾爾村学童保育 曾爾ボランティア交流企画
9月3日 (火)	奈良	午前 午後	体験：曾爾プログラム (曾爾高原ハイキング) 体験：曾爾プログラム (野外炊事) 意見交換：曾爾ボランティアとのディスカッション
9月4日 (水)	奈良 東京	終日	東京へ移動 オリエンテーション (東京)
9月5日 (木)	東京 奈良	午前 午後	講義：国立青少年教育振興機構 概要 子どもゆめ基金部国際・企画課長 杉本 孝之 氏 講義：「若者の社会参画」 神奈川大学人間科学部 教授 齊藤 ゆか 氏 団ミーティング
9月6日 (金)	東京	午前 午後	訪問：NPO 法人 iPledge 事務局スタッフ 山口 記世 氏 訪問：認定 NPO 法人 ミニシティ・プラス 事務局長 岩室 晶子 氏 学生理事 橋本 みなみ 氏
9月7日 (土)	東京	終日	日独合宿セミナー (顔合わせ/ディスカッション) 歓迎夕食会
9月8日 (日)	東京	終日	日独合宿セミナー (ディスカッション/個人発表) 団ミーティング
9月9日 (月)	東京	終日	自主研修 団ミーティング/学習成果発表会の準備
9月10日 (火)	東京	午前 午後	学習成果発表会 自主研修
9月11日 (水)	東京 ドイツ	午前	羽田空港 発 → フランクフルト空港 着

※台風 10 号接近により、ホームステイプログラムは中止としている。

3. ダイジェスト

※台風10号の接近に伴い、8月30日（金）～9月1日（日）に予定していた「ホームステイ体験」から以下のとおり急遽プログラムを変更して実施した。

<8月30日（金）>

○曾爾自然の家活動プログラム体験①「曾爾高原ハイキング（お亀池周辺散策）」

施設の概要や利用方法についてのインフォメーションを受けた後、曾爾自然の家が学校団体などに活動プログラムとして提供している「曾爾高原ハイキング（お亀池周辺散策）」を体験した。職員の話聞きながら雄大な曾爾高原の自然について学んだ。

<8月31日（土）>

○日本の伝統文化体験①「日本の昔遊び体験」

曾爾自然の家の職員が「日本の昔遊び体験」を企画し、こま回しや将棋、羽子板遊びなどで交流し、ドイツ団員と曾爾自然の家の職員の親睦を深めた。



○自然の家活動プログラム体験②「木のスプーン・フォークづくり」

曾爾自然の家の活動プログラムの一つである「木のスプーン・フォークづくり」を体験した。スプーンやフォークの柄に、間伐や整備した木材を利用し、木の特徴を生かしながら思い思いに創作することを通して、日本の木（杉）に触れてぬくもりを感じることができた。

職員の説明から森林への興味・関心を深めるプログラムであることを知り、併せて活動時の安全管理についても学んだ。



<9月1日（日）>

○日本の伝統文化体験②「茶道体験」

茶道体験では職員の説明を聞きながら、実際に自分でお茶を点て、本場の味を味わう貴重な機会となった。



○「ホストファミリーとの交流会」

2泊3日のホームステイは台風の影響により中止となったが、天候も回復し、ドイツ団とホストファミリーの交流会を実施することができた。短い時間ではあったが、無事に対面を果たし、親睦を深めることができた。



○訪問「長谷寺」



< 9月2日（月） >

○訪問「曾爾村立曾爾小中学校」

曾爾村にある「曾爾小中学校」を訪問し、児童生徒との交流を通して日本の小・中学校や地域の子どもたちの実状を学んだ。

第一部では、団員や小学生が互いの小学校生活についての紹介を通じて、日独双方の違いや共通点について学ぶ時間となった。また、小学生はドイツの遊びを体験した。交流のお礼に小学生から歌のお返しがあった。

昼食の時間は、中学生と一緒に給食を食べ、日本の学校生活の一部を体験した。

第二部では、中学生から書道を教わり日本の文化について学ぶ機会となった。また、ドイツ団が考えたドイツに関するクイズや生徒からの質問を通して交流し、生徒にとってもドイツに対する知識を深めるとともに興味関心を高める時間となった。交流のお礼に中学生から歌のお返しがあった。



○訪問「曾爾村学童保育」

曾爾村にある「曾爾村学童保育」を訪問し、過疎地域の学童保育所に通う地域の子どもたちの実状を学んだ。また、子どもたちとドイツ団、曾爾自然の家のボランティアと一緒にレクリエーションゲームをする中で、日本とドイツのレクリエーションゲームや指導方法について学ぶ機会となった。



○ボランティア交流企画

曾爾青少年自然の家のボランティアがクイズやゲームなどを企画し、交流会を実施した。また、互いに感じた疑問や質問などを意見交換し、更に親睦を深めた。

< 9月3日（火） >

○自然の家活動プログラム体験「曾爾高原ハイキング（亀山）」

初日のハイキングでは、天候が悪く山頂まで登ることができず、団員からの要望もあったため、再度ハイキングに挑戦することとなった。登頂開始時は霧が濃く景色も見えなかったが、山頂に近づくにつれて一気に霧が晴れ、曾爾の山々や雲海を望むことができた。



○自然の家活動プログラム体験③「野外炊事」

曾爾自然の家が学校団体などに提供している野外炊事を体験した。はじめに、曾爾自然の家の職員から子どもたちに指導する際の留意点や言葉がけについて、安全管理の視点、目的を設定する際の考え方などについて学んだ。「協力して美味しい日独の料理を作ろう」という目的のもと、ドイツ料理の「チーズシュペッツレ（ジャーマン Pasta）」、和食の「おにぎりとみそ汁」作りに挑戦した。活動中は通訳に頼らず互いの料理を教え合い、共同作業をする中で協力し、美味しい料理を作った。



○曾爾自然の家 法人ボランティアとのディスカッション

事前にドイツ団と日本団のボランティアからディスカッションしたいテーマを集約し、当日は、奈良教育大学名誉教授である生田周二先生をコーディネーターとして迎え、50分間のディスカッションを4クール行った。コーディネーターが提示するボランティア活動に関係する世界のデータや、事前に集約したディスカッションテーマを参考にしながら、各国のボランティア活動・参画の意義を共有し、理解を深めた。そして、普段取り組んでいる様々なボランティア活動に対しても質問や意見を出し合った。

また、コーディネーターによってドイツと日本の教育課程、教育制度の違いがボランティア活動に参画できる環境の違いに影響していることを説明され、このテーマからボランティア活動の内容だけではなく、各国の環境や教育など幅広いテーマにまで視野を広げて、各国のことを知る有意義な時間となった。



< 9月4日（水） >

○東京へ移動

曾爾の職員に別れを告げ、新幹線に乗車し東京へ向かった。



< 9月5日（木） >

○講義「国立青少年教育振興機構 概要」

講師：国立青少年教育振興機構 子どもゆめ基金部国際・企画課長 杉本 孝之 氏

日本における青少年教育のナショナルセンターを担っている当機構について、概要説明を本事業担当課長が行った。当機構が行っている事業や青少年支援に関する説明や、若者がおかれている環境に関する質疑応答等を行った。



○講義「若者の社会参画」

講師：神奈川大学 人間科学部人間科学科 教授 齊藤 ゆか 氏

「ボランティア・生涯学習の観点」より、若者の社会参画についてご講義をいただいた。理論・実践・展望の三つの議題に分け、日本における歴史的背景から、ボランティアに関する国際的な歴史の流れ、評価の手法と、様々な観点から話を伺い、学びを深めることができた。



< 9月6日（金） >

○訪問「NPO 法人 iPledge」

説明者：事務局スタッフ 山口 記世 氏

野外イベント・音楽フェスティバル等で環境・社会問題に関心を持ち、自分から周囲を巻き込んで行動できる若者を増やしていくことを目指した活動について、ご説明いただいた。実際に活躍されている学生ボランティアの方にも加わっていただき、満足いくまで意見交換することができた。



○訪問「認定 NPO 法人ミニシティ・プラス」

説明者：事務局長 岩室 晶子 氏

学生理事 橋本 みなみ 氏

ドイツのミュンヘンで歴史のある「こどものまち」を、日本の横浜で行っている団体を訪問した。子どもたち自身が、自由な発想で社会について知り、体験し、考えるチャンスを作れるような働きかけを学び、子どもに観点を当てた社会参画について学ぶことができた。



<9月7日(土)～8日(日)>

○日独合宿セミナー(ディスカッション/個人発表/交流会)

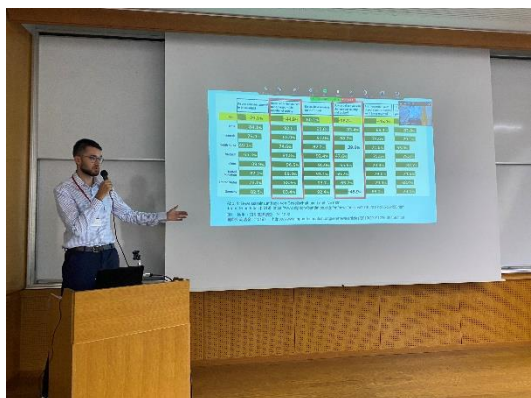
今年度派遣される日本団と、1泊2日で合宿セミナーを行った。テーマに基づいたディスカッションだけでなく、歓迎交流会等のフォーマルの領域を超えたつながりができた。最後には個人発表の時間を設け、自身が大事にしたいことやこれから達成したいことについて、ビジョンを共有しあった。



<9月10日(火)>

○学習成果発表会

来日して2週間で学んだことを、「①日本での気づき」「②(日独の)共通点」「③(日独の)相違点」「④持ち帰る成果」の観点からまとめ、学習成果発表会を行った。対面とオンラインでのハイブリッド形式で開催したため、お世話になった曾爾自然の家職員や訪問先の方々にも見ていただいた。



4. 学習成果発表会



“Gesellschaftliche Partizipation junger Menschen”

1. Unsere Japanreise
2. Was ist uns in Japan aufgefallen?
3. Gemeinsamkeiten
4. Unterschiede
5. Was nehmen wir mit?

「若者の社会参画」

1. 日本での滞在地
2. 日本での気づき
3. 共通点
4. 相違点
5. 持ち帰る成果

Unsere Japanreise 日本での滞在地

Station 2: Soni (Nara)

- Austausch mit den Ehrenamtlichen vom SONI-Center
- Besuch Schule von SONI
- Kennenlernen des Natur-/Outdoorprogrammes
- Treffen mit Gastfamilien

滞在地 2: 曾爾(奈良県)

- 曾爾自然の家ボランティアとの交流
- 曾爾村立曾爾小中学校訪問
- 自然体験・野外活動プログラム
- ホストファミリーとの交流



Station 3: Tokyo

- Austausch mit Ehrenamtlichen
- Austausch Referenten und Personal von NIYE

滞在地 3: 東京

- ボランティアとの交流
- 青少年教育振興機構(専門)職員との交流

Station 1: Osaka

- Ankunft & Kennenlernen
- Sightseeing & Vorbereitung des Austausches

滞在地 1: 大阪

- 日本到着、顔合わせ
- 観光 & 交流準備

Was ist uns in Japan aufgefallen? 日本での気づき



Umwelt & Nachhaltigkeit

- Wissen zur Kreislaufwirtschaft
- Plastik + Einwegware
- beginnende Nachhaltigkeitsbewegungen und Initiativen
- Großes Natur- und Outdoorprogramm
-> Fokus auf Gesundheit und Lebensqualität

環境 & 持続可能性

- 循環経済に関する知見
- プラスチック + 使い捨て製品
- 持続可能性追求の始まりと活動団体
- 大がかりな自然・野外プログラム
->健康と生活の質にフォーカス



Esskultur

- gemeinsame Rücksichtnahme beim Essen
- respektvoller Umgang mit dem Essen und gute Tischmanieren

食文化

- 食事中互いに気を配る
- 食べ物を粗末にしない、テーブルマナーが良い

Was ist uns in Japan aufgefallen? 日本での気づき



Schule

- kleine Klassen (bevölkerungsbedingt)
- klare Strukturen (Abläufe und Aufgaben)
- System "Integrierte Pflichtschule" (Grundschule + Mittelschule)
- Inklusionsaspekt

学校

- 1クラスの人数が少ない (人口が少ないため)
- 仕組みが明白 (流れと課題)
- 一貫型義務教育システム (小学校 + 中学校)
- インクルージョンの視点



Menschen

- Respekt & Achtung (non-verbal, z.B. durch Verbeugung)
- Kommunikation: bedacht und höflich mit einem Sinn für Harmonie

日本人

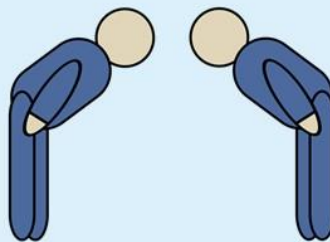
- 敬意と尊重 (言葉を使わず、例えばおじぎ)
- コミュニケーション: 気配り、調和の感覚をもって丁寧

Ehrenamt und Partizipation in Japan 日本のボランティアと参画

Entnommen aus der Ehrenamtsdiskussion (Studie) von Prof. Syuji Ikuta

Die eigene Wahrnehmung als Erwachsener und der Selbstwert sind trotz ehrenamtlichem Engagement immer noch niedrig.

Dabei herrscht aber ein großer Wille etwas verändern zu wollen.



生田周二教授のボランティアに関するディスカッション (研究) から。

ボランティア活動を行っているのに、自分が大人で、よいところがあるとはまだまだ認めにくい。

しかし、何かを変えたいという気持ちは大きい。

Gemeinsamkeiten 共通点



1. Motivation

Engagement für persönliche Weiterentwicklung, gesellschaftliches Wohl, Feedback der Kinder

2. Sozialer Zusammenhalt

Gemeinschaft wird durch Ehrenamt gestärkt

3. Schulungen

Notwendige Grundlagen (z.B. Erste-Hilfe Kurs, Präventionsmaßnahmen, Einführungsgespräch)

1. モチベーション

自分の成長、公共の福祉、子供達から得るフィードバックのための参加

2. 社会の結束

ボランティアによって社会は強化される

3. 研修

必要な基本（例えば応急手当の研修、予防措置、オリエンテーション）



Gemeinsames Kochen der Ehrenamtlichen & Besuch der Grund- und Mittelschule Soni-Mura

ボランティアの共同炊飯と曾爾村曾爾小中学校訪問

Unterschiede 相違点



1. Historische Entwicklung

JP geprägt durch Erdbeben 1995
DE längere Tradition seit Mittelalter

2. Gesellschaftliche Verankerung

JP kritische Infrastruktur durch Staat abgedeckt
DE Katastrophenschutz, Rettungsschwimmer,
Deutsches Rotes Kreuz

3. Strukturelles Fundament

JP eher zentralistisch organisiert
DE hat föderale, regional unterschiedliche Strukturen

4. Rechtlicher Rahmen

JP ohne klar definierte rechtliche Grundlage
DE klare rechtliche Regelungen für das Ehrenamt

1. 歴史的展開

日 1995年の阪神淡路大震災の影響
独 中世から続く長い伝統

2. 社会への定着

日 災害の影響を受けやすいインフラは国が守る
独 防災、水難救助、ドイツ赤十字社

3. 仕組みの基礎

日 どちらかといえば中央で組織
独 連邦制なので地域によって異なる仕組み

4. 法律の枠組み

日 明確に定義された法的基盤がない
独 ボランティアに関する明確な法律

Unterschiede 相違点



5. Trägerschaften

JP häufig staatlich unterstützt
DE stärker durch NGOs und private Organisationen geprägt

6. Institutionalisierung

JP staatliche Programmvorgabe
DE Subsidiaritätsprinzip

7. Geschlechterverteilung

JP tendenziell mehr Männer im Ehrenamt
DE nahezu gleichverteilt

8. Altersverteilung

JP höchstes Engagement bei Jungen (<18) und Alten (>60)
DE höchstes Engagement bei Berufstätigen (30-49
Jährige)

5. 担い手

日 国の援助を受けていることが多い
独 NGO及び民間組織の影響が強い

6. 制度化

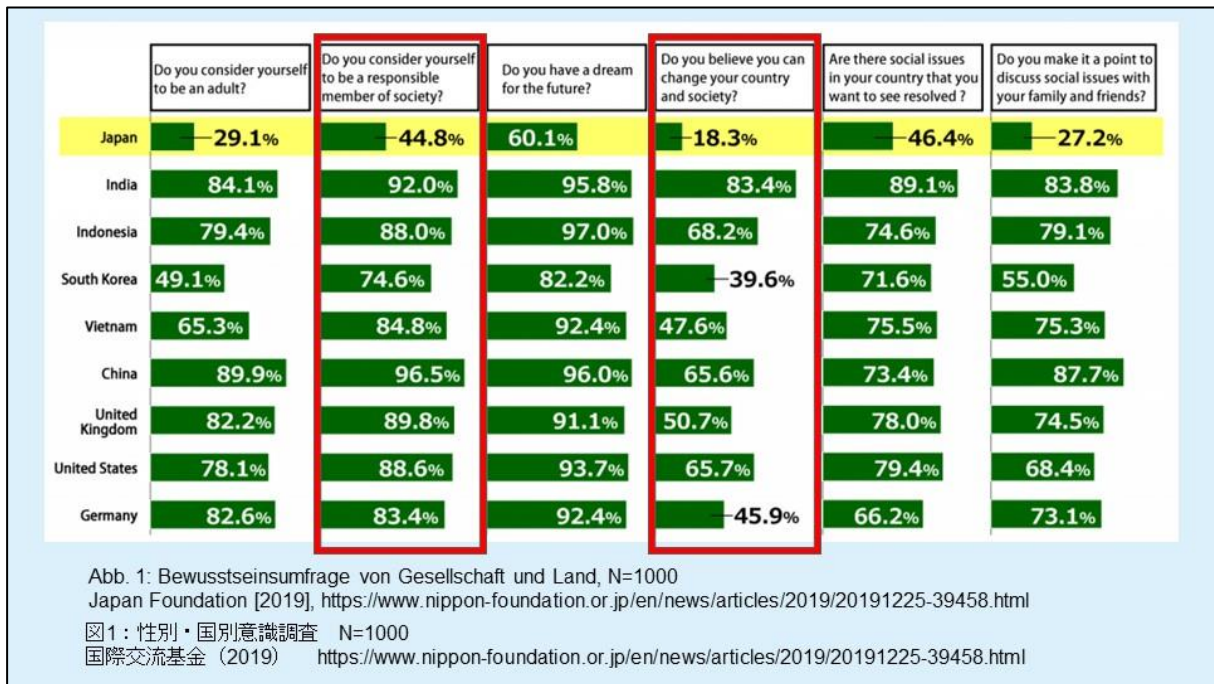
日 国が予めプログラムを定める
独 補完性原理

7. 男女構成

日 ボランティアは男性が多めの傾向
独 ほぼ均等

8. 年齢構成

日 若者 (<18歳) とシニア (>60歳) が最も熱心
独 就業世代 (30 - 49歳) が最も熱心



Was nehmen wir mit? 持ち帰る成果

- **Naturfokus**
 - Lernkontext
 - Materialien
- **Erlebnisorientierung**
- **flache Hierarchien**
- **Musik**
 - Spielerische Gestaltung
 - Teambuilding
- **Bewusstsein für Deutsche Ehrenamts-Strukturen, Angebote und Projekte**



- ・自然に目を向ける
 - ・学びのコンテキストとして
 - ・教材として
- ・体験型学習
- ・高低差の少ないピラミッド型
- ・音楽
 - ・遊びの要素
 - ・チーム作り
- ・ドイツのボランティア構造、提供するサービス及びプロジェクトに対する認識




Was nehmen wir mit? 持ち帰る成果

- **Icebreaker**
- **Wertschätzung**
- **Klare Zielsetzung; “Vision”**
 - Klare Kommunikation dieser “Vision”
 - Achtsamkeit auf diese “Vision“
 - Veränderung der Denkweisen
- **Kurzfristige Angebote**
 - Gesellschaftlich erwünscht
 - Niedrigschwelliger Zugang zu Ehrenämtern



- アイスブレイクの担い手
- よい評価
- 明確な目標設定: 「ヴィジョン」
 - ・ この「ヴィジョン」の明確なメッセージ性
 - ・ この「ヴィジョン」を丁寧に扱う
 - ・ 考え方の変化
- 短期的活動
 - ・ 社会が求める
 - ・ ボランティアを始めるハードルが低くなる



(Heiße) Quellen 出典

- Bundesministerium für Familie, Senioren Frauen und Jugend:
<https://www.bmfsfj.de/bmfsfj/aktuelles/presse/pressemitteilungen/zahlen-daten-fakten-zur-entwicklung-des-freiwilligen-engagements-in-deutschland--176840>
- National Soni Youth Outdoor Learning Center: <https://www.tokuoka-ao.co.jp/english/works/timber/national-soni-youth-outdoor-learning-center-nakayoshi-hall/>
- National Institute for Youth Education: <https://www.niye.go.jp/english/index.html>
- Ipledge: <https://www.iplede.jp/>
- mini city plus: <https://minicity-plus.jp/>

ドイツ連邦家庭・高齢者・女性・青少年省

<https://www.bmfsfj.de/bmfsfj/aktuelles/presse/pressemitteilungen/zahlen-daten-fakten-zur-entwicklung-des-freiwilligen-engagements-in-deutschland--176840>

曾爾自然の家

<https://www.tokuoka-ao.co.jp/english/works/timber/national-soni-youth-outdoor-learning-center-nakayoshi-hall/>

国立青少年教育振興機構

<https://www.niye.go.jp/english/index.html>

Ipledge: <https://www.iplede.jp/>

Mini city plus: <https://minicity-plus.jp/>



**Vielen Dank für Ihre
Aufmerksamkeit**
ご清聴ありがとうございました



 **National Institution For Youth Education**
独立行政法人 国立青少年教育振興機構

jdzb

5. 成果と課題（国際・企画課）

（1）企画

本事業は、日本にてボランティア活動等を通じて社会参画を果たしている学生や団体との交流を通し、団員自らがドイツで実践している活動のみならず、社会的課題やその解決策に関する情報を日独双方の観点から比較することを目的としてプログラムを構成した。特に、都市部において活動を展開する若者と、地方において社会参画を実践する若者の双方との意見交換を通じて、日本全体の社会参画に関する現状を多角的に学ぶ機会を提供した。

また、台風 10 号の接近により中止を余儀なくされたものの、2019 年（令和元年）以来となるホームステイプログラムも計画していた。

（2）成果

例年に比べ、日本国内で活躍する学生ボランティアとの交流機会を多く設けることができた。日本団員に加え、曾爾ボランティアとは 1 泊 2 日の共同生活を行い、また各訪問先においても 3 時間という十分な交流時間を確保いただいたことにより、深い意見交換が可能となった。ボランティアに関する歴史的展開や社会への浸透状況といった異なる点は多く見受けられたものの、モチベーションや活動に対する熱意においては共通する部分が多く、「遠く離れた地においても同様に努力を重ねている仲間がいると知れただけでも有意義であった」との感想が寄せられた。また、両国の制度や研修体制についても議論が交わされ、各団体で即時導入を希望する声も上がった。

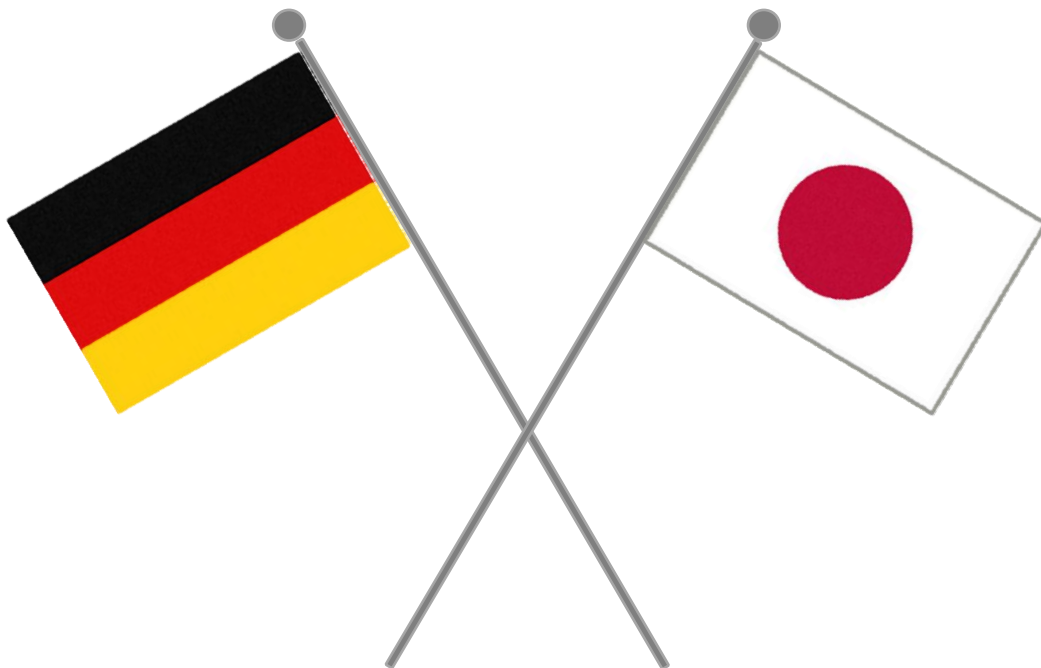
もう一つの成果として挙げられるのは、合宿セミナーのディスカッションにおいて、政治に関する話題が多く取り上げられた点である。例年、日本団からは政治に関する発言が乏しく、ドイツ団より「より多く政治について議論したかった」との指摘を受けることが常であった。しかし、本年度においては多様な意見が活発に交わされ、双方の国における政治教育や政治的話題の取り扱い方、自身の政治への向き合い方について具体的な議論を行うことができた。この成果を次年度以降にも繋げるべく、過年度団員に継続的に関わっていただき、次の団員へその経験を語り継ぐことで、良好な流れをさらに醸成していきたいと考える。

（3）課題

課題として挙げられるのは、休館日や地方プログラムの日程との兼ね合いによりディスカッションの時間を十分に確保することが叶わず、また、参加者が初対面であったことも相まって、深い学びに達するまでの時間が大半となってしまった点である。ドイツにおいても同様の合宿セミナーが実施されているものの、2 泊 3 日と十分な時間を設け、一つ一つのテーマをより深く掘り下げる機会を設けるべきであった。

事業の日程調整については、2 年前より候補日を検討することが可能であるため、プログラムの内容や曜日などのパターンをあらかじめ定め、十分な時間が確保できるよう計画したい。

今回の企画・運営に際し、多くの方に携わっていただいたことで、ドイツ団の有意義な研修を展開することができた。プログラムに協力していただいた全ての方に感謝を申し上げたい。



令和6（2024）年度 文部科学省委託事業
日独学生青年リーダー交流事業 事業報告書

令和7年2月発行

編集発行



独立行政法人 国立青少年教育振興機構 国際・企画課

<http://www.niye.go.jp>

〒151-0052 東京都渋谷区代々木神園町3-1

TEL 03-6407-7725

本報告書は、文部科学省の委託事業「青少年国際交流推進事業」として、独立行政法人国立青少年教育振興機構が実施した令和6年（2024）年度「日独学生青年リーダー交流事業」の成果を取りまとめたものです。

従って、本報告書の複製、転載、引用等には文部科学省の承認手続きが必要です。